

弘前藩の刑法典 (八) — 寛政律 —

付 『要記秘鑑』三十三 (一)

橋本久

目次

はじめに

一 安永律 [第六号]

付1 『御刑罰御定』(安永律) [第十三号]

二 寛政律 [第七号]

(一) 『御刑法書之写』 [第八号]

(二) 『寛政律』(その一) [第十一号]

(三) 『寛政律』(その二) [第十一号]

(四) 『寛政律』(その三) [第十一号]

付2 『隠商過料定牒』 [第十三号]

付3 『人別方御用取扱條例』『人別調方取扱條例』 [第十三号]

(五) 『寛政律』(その四)

補訂1 『藩法史料集成』所収「弘前藩御刑法牒」

[第十四号]

(六) 『寛政律』(その五)

付4 『諸取引御触書』『公義御書付留』『公義御触書留』

付5 (参考) 『公事訴訟取捌』 [第十五号]

(七) 『寛政律』(その六) [本号]

付6 『要記秘鑑』三十三 [本号以下]

(八) 以下

三 文化律

料 二 寛 政 律

(七) 『寛政律』(その六)

凡 例

資

- 一 弘前市立弘前図書館所蔵本〔G K 三二二・五、二七〕を用いた。
- 一 字体、字配りはできる限り、原本に従った。変体がなっていないのは原本に必ずしも従ってはいない。
- 一 原文の朱訂は一部のみ示した。
- 一 原文の行末が次行に及んだ場合は、行末を示すため、「」を加えた。
- 一 原本には見られないが、項目の前など適宜行間を空けた。
- 一 原本の丁数・表裏を各丁表裏の終行末に「」で示した。
- 一 便宜上、(一)〜(七)に做い、各項目に一、二、三……、各条文に仮番号1、2、3……等の数字を付した。
- 一 条文番号のうち18〜21については、これまで蝦名庸一「弘前藩御刑法牒(寛政律)」(『弘前大学国史研究』一五・一六合併号)に做ってきたが、17〜21条を一条と扱うべきと考えるので、以後は18〜21を省く。条数の整理は最終段階で試みたので、便宜上、他の番号については当面変更しない。
- 一 他に適宜書き加えた箇所は「」で示した。

〔表紙〕



〔表紙見返し〕



覺

此度御刑法御改被仰付ルニ付沙汰仕ル處明律与

歴代之刑法を致損益相立ルニ付律之輕重宜

義理共ニ正敷御座ル得共當時ニ比ヘル得者一昧之律

重ク御座ル間明律ニテ答罪ニ相當ル部ハ大方當時

戸メニ而相濟ル振合ニ御座ル間猶又刑法も違ハ間

其便ニ者難相用得依之當時通例行ひル刑

名を以明律之格ニ隨ヒ差等相立專其義理ニ

与リ輕重相分申ル尤右之内 公儀御定ニ拘ル義

并是過之御法ニ而俄ニ輕重難相分ハ与得沙汰仕

斟酌減ル間此末御刑法御沙汰御座ル節若

此度相定ルケ條之内ニ洩ル義御座ル而も右之趣を

以明律を致量考罪之輕重無之様則此度

相立ル御刑法名目与明律刑名与相當之差等如斯

戸メ 明律答刑

五日 十

十日 式十

十五日 三十

廿日 四十

三十日 五十

(二ウ)

(二オ)

鞭刑 明律杖刑

三 六十

六 七十

九 八十

十二 九十

十五 百

鞭刑追放 明律徒刑

十八所拂 一年 杖六十

廿一三里 一年半 杖七十

廿四五里 二年 杖八十

廿七七里 二十半 杖九十

三十拾里大場御搆三年 杖一百

徒刑 明律流刑

半年鞭三十 二千里杖一百

一年鞭三十 二千五百里杖一百

一年半鞭三十 三千里杖一百

死刑 明律死刑

斬 絞

獄門 斬

火刑 火刑ハ火付を極重科又相立ル公儀御定ニ付明律相當無之

(二ウ)

(二オ)

御刑法御定

御刑法名目

一 戸ノ

1 戸ノ五日 同十日

同十五日

同 廿日 同三十日

但子兄弟或ハ奉公人の類戸ノ難相成者ハ其日數之通過料人夫或ハ一日六拾文の積を以過料錢為差出ル事

〔三才〕

二 鞭刑五

2 鞭三 同六 同九 同十二 同十五

三 鞭刑追放五

3 鞭十八所拂 同廿一三里 同廿四五里 同廿七七里

同三十拾里大場御拂

但追放鞭十八已上ニ由得共其罪之字細ニ依里其所ニ

難差置者ハ鞭數ニ不拘所拂可致事

四 徒刑三

4 徒半年鞭三十 同一年鞭三十 同一年半鞭三十

但徒刑之者共銅鉛山江差遣鞭刑之上年限

之通苦使可致事

〔三ウ〕

五 死刑四

5 斬 獄門 磔 火刑

六 贖刑

6 鞭 三〔米〕料 過三貫六百文 同六 四貫貳百文

同 九 四貫八百文 同十二 五貫四百文

同十五 六貫文 同十八 貳貫文

同廿一 拾五貫文 同廿四 拾八貫文

同廿七 貳拾壹貫文 同三十 貳拾四貫文

徒一年半 三拾六貫文 同一年 三拾三貫文

徒一年半 三拾六貫文 死刑四拾貳貫文

右過料之義ハ老幼廢疾之類刑ニ被行さるもの并過テ

人を害シ或ハ疵付ル類相当之過料〔七〕ニテ罪を贖可申事

7 一過料之者若貧困ニテ上納難相成者ハ銅鉛山江

差遣一日六拾文之積を以夫役ニ使ひ可申事若又

老幼廢疾之類夫役ニ難相成者其身窄

舍之上一年或ハ二年ニテ用捨可致事

〔七 表題欠〕

8 惡逆

祖父母父母を打擲いたし或ハ殺さんと謀り并  
伯父姑兄姉母方之祖父母を殺しル者之事

9 不道 一家之内死罪ニあらざる者三人を殺し并人之支體を切ほときむこく切害いたしゆもの事〔四ウ〕

10 大不敬 御宗廟御飾物并御召物等盜取ゆ者之事

11 不孝 祖父母父母之事を訴へ或ハ悪口いたし并扱宜から壽難洩せしむる者之事

12 不義 支配之もの頭分の者を殺し弟子として師匠越殺しゆ者之事

八 老幼癡疾之事

13 歳七拾巳上十五巳下并癡疾のもの死罪以下

贖ニ亭用捨可致事八十巳上十歳巳下死

罪を犯しゆ者ハ 上聞之上時宜御沙汰可被仰付ゆ

事盜賊并人ニ疵付ゆ者贖を出セ可申事其〔五オ〕

餘之罪ハ御搦無之九十巳上七歳以下者死罪

ニ而も刑を不可加事

但罪を犯しゆ節未老疾ニ無之事頭アラハレゆ節老疾ニ

及ゆ得者老疾を以沙汰可致事幼少之節罪を

犯し壯年ニ至り事頭ゆ節幼少之儀を以沙汰可致事

癡疾之事惣而人事ニはつ連し片輪病人を云な里馬鹿乱心之類も癡疾与可致事

九 科人者首徒越可別事〔マ、以下同〕

14 二人以上申合犯罪ゆ節ハ其内趣意相企ゆ者

越首与致ゆ事其余ハ徒与致ゆ事徒の者ハ首ノ罪一等を減し可申事尤本文ニ同類不殘ト有之ハ〔五ウ〕首徒之差別無之事

一〇 一人ニ而二罪有之事

16 凡二罪以上共ニ頭ゆ節ハ重きもの一ケ條を以罪を

定ゆ事若一罪先ニ頭連既ニ刑を加へル後外之罪

頭ゆ節ハ軽きものを并同等之科ハ御沙汰ニ不及

もし跡ニ頭ゆ科重ゆハ、沙汰直しニ致し前罪之鞭数差引殘鞭数斗刑を加る事

一一 五軒組合連坐ニ可及箇條之事

17 隠田畑 隠津出 盜柚 博奕之者 隠商賣〔六オ〕

右ケ條之内罪を犯しゆもの組合之者ハ本人の

相當を以過料ニ直し組合四軒〔マ、以下同〕より差出ゆ事

但組合四軒ニ不滿意者ハ四軒の割合を以不宜分ハ用捨致しゆ事

一二 科人自身申出ゆ者

22 惣而悪事を致ゆもの事未タ頭さる巳前ニ自身

申出<sup>ル</sup>於てハ其罪御用捨被 仰付<sup>ル</sup>事 但  
人<sup>ヲ</sup>疵付或ハ物ニ寄て不可償品并姦道之  
類ハ不許事

〔六ウ〕

23 竊盜或ハ手段等<sup>ニ</sup>て人の財物を取り其後  
過を悔<sup>ル</sup>而自身与本人江返し<sup>ル</sup>者上江申出ると  
同然其科可許事

〔一三 表題欠〕

24 父母兄弟伯叔父姑夫婦之間罪有之相隠  
ハ共御咎無之但其事を洩し逃去しむる共  
不可罪事家來主人之為<sup>ニ</sup>隠し<sup>ル</sup>而も是又  
同然之事其外妻之父母娘之駕夫之兄弟ハ  
相隠<sup>ル</sup>ハ節平人<sup>ト</sup>罪三等を減し<sup>ル</sup>事

一四

親族輕重之事

25 本文<sup>ニ</sup>祖父母と有之ハ高祖曾祖同様之事  
孫と有之ハ曾孫支孫同様之事嫡孫之承  
祖ハ父母と同様嫡母養母實母同様之事

〔七オ〕

一五

罪可減者累減を得事

〔本〕  
〔首〕 縦ハ罪を犯し<sup>ル</sup>者長ト徒ト有之時其徒<sup>ノ</sup>者ハ

26 罪一等を減し<sup>ル</sup>ハ其身外ニ可減子細有之時ハ  
又幾度も段々<sup>ニ</sup>可減事

一六

婦人犯罪之事

27 婦人之犯罪ハ鞭十五ニ不過鞭十五以上ニ相當  
之節十五鞭加江<sup>ル</sup>而殘數過料ニて罪を贖可申事  
但婦人十五鞭以上之贖罪ハ差別可有事

〔七ウ〕

28 婦人之鞭刑襦袢之上<sup>ニ</sup>与<sup>リ</sup>打可申但姦姪之罪  
衣を去里直ニ打可申事竊盜之類ハ入墨を  
許可申事

一七

不義之財物取捌<sup>ル</sup>事

29 財物之上ニ而罪を犯し<sup>ル</sup>者本人相手共ニ罪有之  
時ハ其財物ハ没収可致事若相手<sup>ノ</sup>方有罪

〔八オ〕

30 其財物之没収可致もの并本人江可返もの既ニ  
費し用得<sup>ル</sup>ハ、償可差出事若科人身死<sup>ル</sup>而  
品物費用<sup>ハ</sup>節ハ取立ニ不及事

一八

同類之内出奔有之片口ニ相成<sup>ル</sup>者之事

31 同類之内一人ハ出奔いたし一人召捕節其

者致出奔の者も本人之旨申出別ニ證人

無之時ハ其者ハ從ニ致し刑を可加事其後

致出奔の者も召捕亂明致の節最初

之者本人ニ相違無之ハ、則首と致し残る

罪を加へる事

〔八ウ〕

一九

罪科加減之例

32 加と云ふハ本罪之上ニ猶加へて重く致の事減と

云ふハ本罪之上ニ猶減て軽く致の事但減の節ハ

四段之死罪三段之徒罪又ハ一等と致減の事

加へる節ハ一段毎<sup>〔七〕</sup>一等と致の事尚又加罪ハ

從一年半鞭三十限まで加へて死ニ不可入尤

其罪ニ寄加へ亭死ニ可入ものハ其ヶ條ニ其譯

断有之事

〔九ウ〕

二〇

關所之事

33 關所ハ鞭三十以上専利欲ニ拘の科ハ其私欲之

輕重ニ寄田畑或ハ家屋敷家財等欠所可申

付事重き罪でも利欲ニ不拘者ハ律之ヶ條ニ

出の外ハ關所不可致

二一

取押物之事

34 惣而犯禁の物を取押の茂其懸合役筋者ニ

無之ハ、其品取押の者江被下<sup>〔八ウ〕</sup>の事其役筋ニテ

取押のハ、押物之多少ニ寄御賞被下其品

没官可致事

〔九ウ〕

二二

人命を謀害殺の者

35 宿意を以亭謀害人を殺のもの其張本人者

獄門加擔手傳いたし殺の者斬罪加擔斗ニ而

手傳不致ものハ徒一年半鞭三十

36 疵付の斗ニ而不死時ハ張本人ハ斬罪加擔手傳

致のものハ徒一年半鞭三十

37 謀殺を行ひ得ハ疵付不申者共張本人ハ鞭三十

加擔手傳之者鞭十五

38 右之張本人多とへ其場ニ不臨共殺の節者

其身手ニ掛殺の同然疵付の節ハ手ニ可け疵

付の同然之事加談之者其場ニ不臨の得者

罪一等を許可申事

〔一〇ウ〕

点羽其場臨ゆる者罪一等を免し可申事

39 若因之財實を取らへハ強盜之律ニ随ひ張本

人ハ加談之無差別不殘磔但同行之内にても

財を分ケ不申らへハ謀殺之律にて捌り事

三三

謀親を殺ゆる者

〔一〇ウ〕

40 謀て親を殺ゆるもの男女ニ不限肆し者鋸引

婦人夫之父母を殺ゆるも同様之事

鋸引之もの罪之次第建礼いたし往来道路ニ

肆毒事三日往来之者勝手次第鋸引を致ゆる

事右日限相済らまで致鋸引ゆるもの無之ゆる者其節引廻之上條

41 殺逆之事既ニ行ひ得者縦ヒ疵付不申共磔

親殺之者妻子ハ不殘遠置放家屋敷家財

闕所子ニ而も別宅之者ハ御用捨之事

43 親類之もの於自滅ハ死骸致鹽漬ニ磔可

致事

〔一一オ〕

二四

親殺之謀殺

44 祖父母を殺んと謀り既ニ行ひ得者獄門殺ゆる得者

引廻之上磔母方之祖父母同様之事

45 婦人夫之祖父母并夫を殺ゆるもの同様之事伯

叔父姑姉姉ハ謀殺既ニ行ひらへハ徒一年鞭三

十疵付らへハ獄門殺ゆる得者磔

47 祖父母父母子孫を謀殺致ゆるものハ不及下死人

徒一年半鞭三十

48 伯叔父姑甥姪を謀殺いたし兄弟姉妹を謀

殺致ゆるもの斬罪

点羽疵付の節と疵付毒ゆるとも其事頭の節如何

〔一一ウ〕

二五

謀亭主人を殺ゆる者

49 謀て主人を殺しゆるもの男女ニ不限鋸引肆し者

但疵付らへハ總て子の父母ニ對しゆる同様之事

45 下人他之主人を殺ゆるもの磔但下人主人与り暇出

外江奉公致し罷在本の主人を殺ゆる者他之主

人を殺ゆる同様之事

二六

姦ニ因亭夫を殺ゆる者

51 妻妾他之者と姦通致し因亭夫を殺しゆる者

〔一一オ〕



引廻之上磔姦夫獄門若男之手段のミよて

女其場「マ、」を雖不知女ハ斬罪又女之手段斗にて

姦夫謀を不知時ハ只姦夫之刑ニ一等を加へて

52

罪ニ行ふ事妻妾人と姦通致しを現在姦  
通之所ニおひて見届則時ニ殺しものハ御咎「也」

無之事もし其場を立去れば後訴も無之擅ニ

殺しものハ喧嘩ニ亭人を殺しと同様之事

二七

一家三人を殺しもの

〔二二ウ〕

53

一家之内非死罪ニ三人を殺し并人の支體を  
切ほときむこく殺害致し者引廻之上磔家財

闕所死者之家江被下事妻子ハ遠追放加

談致しもの手段致し者共獄門但追放之義

別居之子ハ御用捨之事

二八

頭分之者を謀殺致し者

54

支配之者頭分之者を殺んと謀里既ニ行ひゆハ  
徒半年鞭三十疵付ゆヘハ斬罪殺し得者磔

二九

呪詛毒薬

〔二三オ〕

55

呪詛調伏等を以人を殺さんと謀し者謀殺之律  
を以罪ニ行ふ事若唯人を苦んと謀し得者二

等を滅し事毒薬を用ひ者同様之事毒

薬を買未用者鞭三十其事を知亭薬

を賣者同罪不知時ハ御咎是なし

三〇

打擲ニ亭人を殺し者

56

本与り巧ミ亭殺し心ニ者無之一時之喧嘩打擲  
ニ亭人を殺し者ハ斬罪尤相手方理盡ニ而不得

止事於切害者相手方親類名主詮義之上

被殺し者平日不法者ニ相違無之ゆハ、死罪一等

〔二三ウ〕

を滅し事

〔57 欠〕

三一

怪我ニ亭人を殺し者

58

怪我ニて人を殺し或ハ疵付し者打擲之律「也」  
依て贖を取其者江被下事

59

途中馬者ニて人を過ひ者緩怠之事無之ゆ得者  
怪我を以沙汰可致事若不愼之義於有之者

打擲之律を以て刑を可加事

料

60 危き仕業いたし人を殺者贖ニ者難相成打  
〔二四オ〕

61 擲之律を以て刑を可加喧嘩等ニ而傍之人を

殺し疵付ゆもの喧嘩ニて殺疵付ゆと同様

資

62 若又謀て人を殺んとして過て別人を殺疵

付ゆへハ謀殺を以て沙汰可致事

三三

夫有罪之妻妾を殺事

63 妻妾夫之祖父父母父母を打擲等ニ依里其夫

打可へ因而死ニ至ゆ得者御構無之若又擅ニ殺ゆハ、

鞭十五外之罪等ニ依リ打擲ハ可為下手人事夫

64 妻妾を打擲或ハ罵等ニ而其妻妾自害致ゆ  
〔二四ウ〕

者不及御沙汰ニ但重き疵等為負ゆ節夫妻

妾打擲之律を以沙汰可致事

三三

人を逼亭死を致ゆもの

65 事ニ依里人を逼里其人自害致ゆ者鞭十五

金貳両を出さし免死者之家江被下ゆ事若茲を

行ひ盜を致ゆ多免人を逼里死を致ゆ者獄門

三四

人殺之者内濟ニ致ゆ者

66 祖父父母<sup>〔一、二、三〕</sup>之為ニ殺さ連其子孫内濟致ゆハ、

徒老年半鞭三十夫被殺内濟致ゆ者是又  
〔二五オ〕

同様伯叔父兄弟之分ハ二等を減し可申事若

子孫之為ニ被殺祖父父母内濟致ゆ者鞭九

常人之内濟ハ鞭三

67 内濟之為賄を取ゆ者ハ錢之高を以て竊盜ニ

準重き方ニて沙汰可致事祖父母殺さ連賄を

68 取ゆハ、死罪同居或ハ同行之人始より其人を謀

て害せんと壽奈る越乍存不留者并被殺ゆ後

不訴者鞭十五

三五

喧嘩打擲ハ疵之輕重を以て罪を

定る事  
〔二五ウ〕

69 手足或ハ外之物を以人を打擲致ゆ者戸メ十日疵

付ゆへハ戸メ廿日但打ゆ處破連壽ゆ共青赤ニ腫ゆヲ

疵と定ゆ事血鼻口之内与り出或ハ内損血を

吐ゆ者鞭九不淨之ものを以人の頭面を汚ゆ者

右同様

71 齒老枚或ハ手足之指一本打<sup>〔一、二、三〕</sup>一目を傷ひ并耳

鼻を傷附者鞭十五湯火を以て人を傷ゆ者不淨を

72 以て人の口鼻之内江入ハ茂同様之事齒式枚指式本

以上<sup>マ</sup>打<sup>マ</sup>ハ者鞭十八人之骨を打<sup>マ</sup>兩目を傷<sup>マ</sup>ひ或ハ (二六オ)

婦人胎を墮し并一切刃物之切疵者鞭式拾四但

兵器<sup>マ</sup>亭も柄を以亭打<sup>マ</sup>ハ刃ものニ者無之事

74 手老本足老本を折或ハ一目を潰<sup>マ</sup>ハ者鞭三十

75 兩手足を打或ハ兩目を潰<sup>マ</sup>し或ハ持病等有之

處因而癡疾<sup>マ</sup>至らしめ<sup>マ</sup>ハ者人の陰陽を傷<sup>マ</sup>ハ者

徒老年半鞭三十右科人家財半分を以疵を

付<sup>マ</sup>ハ者へ被<sup>マ</sup>下<sup>マ</sup>ハ事

右條々之科人大勢ニて犯<sup>マ</sup>ハ節其内疵付<sup>マ</sup>ハ者

を重罪ニ致<sup>マ</sup>ハ事本趣意企<sup>マ</sup>ハ者ハ疵付不申<sup>マ</sup> (二六ウ)

而も其次之科<sup>マ</sup>申付<sup>マ</sup>ハ事但疵を得<sup>マ</sup>ハ者若死<sup>マ</sup>ニ

至<sup>マ</sup>ハ得者同行之内人を殺<sup>マ</sup>ハ節不留律ニ依里鞭

十五

点羽疵付<sup>マ</sup>ハ者ハ解死人本人ハ同行之内人を殺<sup>マ</sup>ハ節  
不留律を以て壽<sup>マ</sup>ハ歟

76 喧嘩<sup>マ</sup>亭双方疵を得<sup>マ</sup>ハ節双方之疵相改疵

之輕重<sup>マ</sup>ニて罪を定<sup>マ</sup>ハ節<sup>〔朱〕</sup>尤跡与<sup>マ</sup>リ手を下<sup>マ</sup>し理直<sup>マ</sup>き

方ハ二等を減<sup>マ</sup>シ可申事

三六 疵療治之事

77 疵を蒙<sup>マ</sup>リ<sup>マ</sup>ハ者日限を立打擲<sup>マ</sup>ハ者与里療治致 (二七オ)

さしむ逼<sup>マ</sup>キ事日限之内ニ死<sup>マ</sup>ハ得者打擲<sup>マ</sup>ハもの

可為解死人若日限之内<sup>マ</sup>亭も疵平愈<sup>マ</sup>致<sup>マ</sup>ハ断

出<sup>マ</sup>ハ後餘病<sup>マ</sup>ニて死<sup>マ</sup>ハハ只打擲<sup>マ</sup>ハ罪を加<sup>マ</sup>ハ可申事

78 指老本<sup>マ</sup>打<sup>マ</sup>ハ以上之疵日限之内療治<sup>マ</sup>ニて平愈<sup>マ</sup>致<sup>マ</sup>ハ

得者罪二等を減<sup>マ</sup>ハし日限満<sup>マ</sup>ル日<sup>マ</sup>まで平愈<sup>マ</sup>無<sup>マ</sup>之

者ハ右之本律を相用<sup>マ</sup>得<sup>マ</sup>ハ事尤婦人の破産并

病氣平愈<sup>マ</sup>マ<sup>マ</sup>ても痼疾等<sup>マ</sup>至<sup>マ</sup>ハ得者罪減<sup>マ</sup>シ

申間舖事

79 手足其外之場<sup>マ</sup>ニて輕<sup>マ</sup>キ打疵ハ廿日限金瘡 (二七ウ)

火毒ハ三十日限手足を打<sup>マ</sup>骨痛婦人墮胎ハ五十

日限

三七 勢を以亭人を縛<sup>マ</sup>リ打擲<sup>マ</sup>致<sup>マ</sup>ハ者

80 爭論<sup>マ</sup>依<sup>マ</sup>テ人を縛<sup>マ</sup>リ打擲<sup>マ</sup>いたし或ハ於私家人

を押籠<sup>マ</sup>等致<sup>マ</sup>ハものハ鞭九若疵重<sup>マ</sup>リ内損吐血以

上<sup>マ</sup>ニ至<sup>マ</sup>ハ得者平人打擲<sup>マ</sup>与<sup>マ</sup>リ二等を加<sup>マ</sup>ハ可申事尤

自分手を下<sup>マ</sup>し不申<sup>マ</sup>ハ共差圖<sup>マ</sup>致<sup>マ</sup>ハもの本罪ニ可致

事差圖<sup>マ</sup>を受手を下<sup>マ</sup>し<sup>マ</sup>ハ者一等を減<sup>マ</sup>シ<sup>マ</sup>ハ事

下人主人を打擲致ゆる者 〔二八オ〕

81 下人として主人打擲致ゆる者獄門死ニ至ルヘハ鋸引

怪我<sup>ナ</sup>にて殺ゆる得者斬罪怪我<sup>ナ</sup>亭疵付ゆる得者

資 徒一年半鞭三十主人下人を打擲致ゆる者輕き

疵ハ不及御沙汰打傷已上之疵ハ平人打擲与リ

四等を減し可申死ニ至ルヘハ鞭十八怪我<sup>ナ</sup>にて殺ルヘハ

不及御沙汰事

妻妾夫を打擲致ゆる者

83 妻夫を打擲致ゆる者鞭十五打傷已上之疵平人

与リ三等を可加事一目を潰ル已上ハ斬罪死ニ至ルヘハ

84 磔若妾ハ夫并妻を打擲致ルヘハ又一等を加ヘ 〔一八ウ〕

可申事死ニ至ルヘハ磔尤加ふものハ加へて死ニ入ル事

85 夫妻を打擲致ゆるもの打傷已上ニ非連ハ不及

御沙汰事右曰上ハ平人之律二等を減し可申事

死ニ至ル得者斬罪妾を打擲いたし打傷已上ニル

得者又二等を減し可申事死ニ至ルヘハ鞭三十

86 妻ハ妾を打擲致ルヘハ夫妻を打擲致ルと同様怪

我<sup>ナ</sup>にて殺ルヘハ其證據分明ニおめてハ不及御沙汰事

兄弟之打擲 〔一九オ〕

87 弟并妹共兄姉を打擲致ゆる者鞭十七疵付ゆる得者

鞭三十打傷ゆる得者徒一年半鞭三十刃傷并手

足を打<sup>ナ</sup>一目を潰ル已上斬罪死ニ至ルヘハ獄門伯叔父

姑を打擲致ゆる者同様之事怪我<sup>ナ</sup>にて殺し或ハ疵

付ゆる者本殺傷之罪二等を減し可申事尤贖ニ者

難相成事

88 兄姉共弟妹を打擲ニて殺し伯叔父姑之甥姪

殺ゆる者鞭三十怪我<sup>ナ</sup>亭殺ルヘハ證據分明ニ於てハ

89 不及御沙汰子孫之者祖父母父母を打擲致 〔一九ウ〕

ゆる者并妻舅姑を打擲いたしゆる者獄門死ニ至ル得者

90 鋸引怪我<sup>ナ</sup>亭殺ゆる得者斬罪祖父母父母子孫

を打擲ニて殺ゆるもの鞭十五繼母ハ一等を加ヘ可申事

但子孫之者祖父母父母を罵り或ハ打ルニ依リ依之

打擲致し死ニ至ルヘハ不及御沙汰怪我<sup>ナ</sup>にて殺ルヘハ

是又同様之事

点羽繼母之律も輕減

91 師匠を打擲致ゆる者平人ニ二等を加ヘ可申事殺ルヘハ磔

〔一〇六〕

四二

父母人より打擲せられ其子孫返し打いたしむ者

92

祖父母父母人之為より被為打擲其子孫為救返し

打致しもの軽き疵へ不及御沙汰打傷已上ニ至しむへハ

平人打擲与り三等を減し可申事死ニ至しむへハ定法之通

可為解死人

四三

竊盜

93

盜致し者入墨之上盜取し高ニ應し輕重之

罪科可行事

定

〔一〇七〕

十貫以下 入墨鞭三 十貫以上 同六

貳拾貫以上同九 三拾貫以上同十二

四拾貫已上同十五 五十貫已上同十八

六拾貫已上同廿一 七拾貫以上同廿四

八拾貫以上同廿七 九拾貫已上同三十

百貫以上徒半年鞭三百拾貫以上徒一年鞭三十

百貳拾貫已上徒一年半鞭三十

百三拾貫以上斬從之者死罪一等を許し事

右錢高を以て罪之輕重定し義盜取し品幾人ニ而

分れ而も分前之高ニ不抱盜取し本高を以て一人毎より〔二二〇〕

罪を加へし事尤徒之もの一等を減し可申事一時ニ數

家より盜取し節其内只一家之財多き方を以罪を

定し事米穀等ハ時之直段を以錢より直し品物ハ直

94 盜より忍入しもの財物を取不申し得者鞭三入墨ハ免之

但人之土藏を破里或ハ盜より忍入し次第ニ寄大盜より

紛無之しむへハ、財物ニ不拘入墨〔二二一〕 鞭三十入墨之義腕江廻幅三步

程入墨可致事尤初度ハ右之腕へ彫二度ハ左之

腕へ彫可申し三度ニ及し得者多少ニ不依斬罪

四四

御城中江入盜致し者

96 御城中へ入盜致しむへハ獄門

〔二二二〕

四五

自分預之物私曲致し者

97 御預之物致私曲盜取し者首從之差別無之

盜取し錢高を以罪を定し事尤幾人にて分れ而も

分前之高ニ不拘盜取し本高を以一人毎より罪を加

へし事

定

二貫五百文已下入墨鞭九 貳貫五百文以上同十二  
 五貫文以上 同十五 七貫文以上 同十八  
 拾貫文以上 同廿一 十二貫五百文已上同廿四〔三〇〕  
 十五ノ文以上同廿七 十七貫五百文以上同三十  
 廿貫文已上徒半年鞭三十 廿五ノ文以上徒一年鞭三十  
 三十貫文已上徒一年半鞭三十 同四拾貫文已上死  
 罪之代徒貳年鞭三十

四六

98

御藏之財物盜取ル者

御藏之財物を盜取ル者并御藏廻之者御藏之  
 財物私曲いたしル者首從之差別無之盜取ル錢  
 高を以罪を定ル事尤幾人ニ而分ル而も分前之  
 高ニ不拘盜取ル本高を以一人毎ニ罪を加ヘ可申事

定

五貫文已下入墨鞭六 五貫文已上同九  
〔文帳、以下同〕  
 拾貫已上 同十二 十五貫已上同十五  
 廿貫已上 同十七 廿五貫已上同廿一  
 三十貫已上同廿四 卅五貫已上同廿七

四七

強盜

〔三三〇〕

四拾貫已上同三十 四拾五ノ已上徒半年  
鞭三十  
 五拾ノ已上同一年鞭三十 五拾五ノ已上同一年半  
鞭三十  
 八拾ノ已上斬但御藏廻之者私曲致ル分ハ死罪之代リ  
徒貳年鞭三十

99

追剝強盜之もの既ニ行ひルヘハ財物を取不申ル而も  
 同類不殘徒一年半鞭三十既ニ財物を取ルヘハ  
 不殘磔

100

盜ニ忍入ル者其家之人ノ手向致シ或ハ疵付ルヘハ  
 強盜之可為御仕置但同類之もの助力不致ルヘハ

101

竊盜を以沙汰可致ル事若竊盜既ニ財物を  
 捨逃去ルを其家人追懸ルニ付因而手向致ル者ハ  
 不用此律科人致手向ル律を以刑を加ヘル事

四八

白昼ノ人ノ物を搶奪もの

〔三三〇〕

102

白昼ノ人ノ物を奪取ル者鞭三十若取ル品之高  
 多クハ、竊盜之罪ニ二等を可加事從之者ハ

103

一等を可減難船等之節使ル乘シ乱妨致ル  
 同様之事

104

喧嘩等いたシ因而財物を奪取ル者同様之事

105 巾着切之類ハ搶奪ニ者無之竊盜之律を以て

刑を可加事

〔四九 欠〕

五〇

馬盜

108 馬を盜賣買致ゆる者斬罪

〔二四〇〕

五一

盜袖

109 盜袖取いたしゆる者袖取之多少を以御藏之財物盜

110 取ゆる律を以入墨可免事山師共過木伐取ゆるもの

伐出ゆる過木不殘取上伐出ゆる多少を以罪を加へる事

111 御留山まて柴薪等盜伐ゆるもの過料考貫文

尤伐出之高多ゆる節ハ錢ニ差積一倍之過料可申

付ゆる事御留山ニ無之共御停止木伐荒ゆるもの

右同断

112 山中伐荒有之科人相知不申節ハ伐荒之多少

〔二四〇〕

を以山下村へ過料可申付ゆる事

113 無極印材木賣買致ゆるもの取上之上盜物乍

存賣買致ゆる律を以刑を可加事

〔114 欠〕

五二

流失流木盜揚之者

115 出水之節流失流木取上ゆるもの見分之上五ヶ一

山師方相渡可申ゆる間隱置被見出ゆる節ハ隱木之

多少を以過料為差出ゆる事

定

拾本已下一貫貳百文 拾本已上一貫八百文 〔二五〇〕

廿本已上貳ノ四百文 三拾本已上三貫文

四拾本已上三ノ六百文 五拾本已上四ノ貳百文

六拾本已上四貫八百文 七拾本已上五貫四百文

八拾本已上六貫文 九十本已上六貫六百文

百本已上七ノ貳百文

五三

田野之穀物を盜取ゆる者

116 田野之穀物盜取ゆる者竊ニ準し多少を以罪定

117 入墨同様柴草木石之類人の功を以て伐取積

置ゆるを擅ニ取ゆる者は又同様之事入墨免之 〔二五〇〕

五四

夜中無故人之家江入もの

118 夜中無故人之家江入者鞭三若其家之人則時ニ

殺ゆる者ハ御搦無之若又已ニ捕置擅ニ打擲致し

疵付ゆ者平人打擲々二等を減し罪ニ行ゆ事

死ニ至ゆへハ鞭三十

五五

盜之宿致ゆ者

119 強盜之宿いたし其身不行ゆ共財物を取ゆへハ

磔財物を取不申ゆへハ徒一年半鞭三十

120 竊盜之宿いたし財物を分ケ取ゆ得者其身不行

ゆ共竊盜之首与可為同罪財物を取不申ゆ得者

一等を減し可申事入墨同様之事

121 強盜并竊盜之盜物乍存買ゆもの品物錢ニ

差積竊盜之律二等を減し罪ニ行ゆ事乍

存預物いたしゆ者又一等を減しゆ支品物之

高多ゆ共鞭十五ニテ許可申もし不存ゆ得者御擣

無之品物者本人へ返し可申事

〔五六〕 欠

五七

入墨を抜取ゆ者

123 盜致入墨〔七〕被行ゆ者其後竊ニ抜取ゆ者

〔二六ウ〕

鞭三入墨仕直可申事

五八

謀書謀判致ゆ者

124 御印并奉行諸役人之判を似セ造リ諸渡物等

盜取ゆ者獄門未財物越不取者死罪一等を減し

125 可申似印形似手紙或ハ古手形を取拵公私之

物を取ゆ者竊盜ニ準し錢之高を以罪科之

輕重可行事入墨竊盜同様

126 語らひ手段等ニ而取ゆ者是又竊盜同様之支入

墨免之

〔二七オ〕

127 物取ニ無之申譯之為ニ有合之印形押ゆ類ハ竊

盜ニ準一等を減可申入墨免之

五九

役人を似せゆ者

128 在々通役人似せ往來人馬頭等為差出ゆ者

鞭三十

六〇

似せ金錢造ゆ者

129 似せ金を造ゆ者私ニ錢を鑄ゆ者磔細工人

同罪其餘加談之者死罪一等を減し可申事

似せ金乍存通用致ゆ者是又同様之事

〔二七ウ〕



六一

狂法賄賂之事

130

賄賂を受<sup>レ</sup>狂多<sup>ク</sup>る事致<sup>ル</sup>者錢之高を以輕重之罪科可<sup>レ</sup>行事尤<sup>モ</sup>人<sup>ト</sup>与<sup>リ</sup>受<sup>テ</sup>て<sup>モ</sup>惣錢押合其高を以罪を定<sup>ル</sup>支<sup>シ</sup>し狂<sup>ク</sup>の事重<sup>ク</sup>得<sup>ル</sup>者人乃罪を輕重致<sup>ル</sup>律を以律を加<sup>ル</sup>る事

定

五貫文已下鞭六

五貫文以上同九

拾貫以上同十二

拾五<sup>〔米〕</sup>貫以上同十五

貳拾貫已上同十八

貳拾五貫已上同廿一

〔二八〇〕

三拾メ以上同廿四

三拾五メ以上同廿七

四拾メ以上同三十

四十五メ已上<sup>〔徒半年〕</sup>鞭三十

五拾メ已上<sup>〔同一年〕</sup>徒一年鞭三十

五拾五メ已上<sup>〔同一年半〕</sup>鞭三十

百廿貫已上死罪ニ代<sup>〔徒二年〕</sup>徒二年鞭三十

六二

不狂法賄賂之事

131

頼を受錢越取<sup>ル</sup>共狂<sup>ク</sup>たる事無<sup>ク</sup>之者惣錢之高を押合半分ニ<sup>〔事〕</sup>し亭罪を定<sup>ル</sup>但<sup>レ</sup>老人<sup>ト</sup>受<sup>テ</sup>ル者半分ニ者不<sup>レ</sup>致<sup>ル</sup>事

定

拾メ文已上鞭三

拾貫文已上同六

〔二八七〕

六三

坐贓之事

132

貳拾メ已上鞭九  
三拾メ已上鞭十二  
四拾メ已上同十五  
五拾メ已上同十八  
六拾メ已上同廿一  
七拾メ已上同廿四  
八拾メ已上同廿七  
九拾メ已上同三十  
百貫已上<sup>〔徒半年〕</sup>鞭三十  
百拾貫已上<sup>〔徒一年〕</sup>鞭三十  
百貳拾メ已上<sup>〔徒一年半〕</sup>鞭三十

定

拾貫文已下戸メ廿日 拾貫文以上同三十日

貳十メ以上鞭三 三拾貫已上鞭六

四拾貫以上同九 五拾貫已上同十二

六拾メ已上同十五 七拾メ已上同十八

八拾貫已上同廿一 九拾貫已上同廿四

百貫已上 同廿七 百廿貫已上同三十

〔二九七〕

六四

賄賂之約諾致<sup>ル</sup>者

133

賄賂之約諾いたし未財物手に入不申共<sup>〔マ、イ〕</sup>之を狂<sup>〔マ、イ〕</sup>者ハ  
狂法<sup>〔マ、イ〕</sup>準し一等を滅し罪を加へ可申事約諾のミニ而  
未タ<sup>〔マ、イ〕</sup>狂不申<sup>〔マ、イ〕</sup>へハ不狂法<sup>〔マ、イ〕</sup>準し一等を滅し罪を  
加へ可申事

六五

賄賂を行<sup>〔マ、イ〕</sup>者

134

下々の者願事有之賄賂を行<sup>〔マ、イ〕</sup>而法を狂<sup>〔マ、イ〕</sup>事<sup>〔マ、イ〕</sup>を  
存<sup>〔マ、イ〕</sup>得共差出<sup>〔マ、イ〕</sup>錢高<sup>〔マ、イ〕</sup>を以坐贓之律ニ當亭刑  
を可加事<sup>〔マ、イ〕</sup>尤狂<sup>〔マ、イ〕</sup>たる事重<sup>〔マ、イ〕</sup>へハ重き方<sup>〔マ、イ〕</sup>ニテ沙汰可致<sup>〔三〇オ〕</sup>  
更もし上たるもの強<sup>〔マ、イ〕</sup>而無據差出<sup>〔マ、イ〕</sup>へハ御咎無  
之<sup>〔マ、イ〕</sup>之<sup>〔マ、イ〕</sup>

六六

茂合取立私曲致<sup>〔マ、イ〕</sup>者

135

茂合錢差出せ私用ニ致<sup>〔マ、イ〕</sup>者狂法<sup>〔マ、イ〕</sup>を以罪を行  
ゆ事音信<sup>〔マ、イ〕</sup>相用得自ら使不申ゆとも同様之事

六七

隠田畑

136

隠田畑致<sup>〔マ、イ〕</sup>者一反歩<sup>〔マ、イ〕</sup>五反歩<sup>〔マ、イ〕</sup>まで鞭六五反歩  
毎ニ一等を加へ可申事但隠田畑御取上隠<sup>〔マ、イ〕</sup>

137

反畝一年之年貢可令出也御検見之節<sup>〔三〇ウ〕</sup>  
惡地坏振替見せ<sup>〔マ、イ〕</sup>者右之格<sup>〔マ、イ〕</sup>よて一等を滅し  
可申事尤反畝<sup>〔マ、イ〕</sup>多<sup>〔マ、イ〕</sup>り共鞭十五<sup>〔マ、イ〕</sup>亭許可申事村  
役之者乍存見通ニ致置<sup>〔マ、イ〕</sup>者本人同罪之事  
若不存<sup>〔マ、イ〕</sup>へハ五反歩<sup>〔マ、イ〕</sup>已<sup>〔マ、イ〕</sup>下右之格<sup>〔マ、イ〕</sup>ニ三等を滅し可  
申事尤反畝多<sup>〔マ、イ〕</sup>り共鞭九<sup>〔マ、イ〕</sup>ニ而許可申事

六八

田畑之質入

138

年季越<sup>〔マ、イ〕</sup>以て質入致<sup>〔マ、イ〕</sup>者田地年季相濟  
本人<sup>〔マ、イ〕</sup>元利返済受戻を求<sup>〔マ、イ〕</sup>者外事<sup>〔マ、イ〕</sup>ニ託し  
不相返年來押領致<sup>〔マ、イ〕</sup>者鞭三年來之小作  
米可令返事<sup>〔三二オ〕</sup>

六九

田畑之押領

139

他人之田畑事ニ寄押領致<sup>〔マ、イ〕</sup>者屋敷ハ一軒田畑  
一反歩<sup>〔マ、イ〕</sup>五反歩迄鞭三五反歩<sup>〔マ、イ〕</sup>毎ニ一等を加へ可  
申事尤反畝<sup>〔マ、イ〕</sup>多<sup>〔マ、イ〕</sup>り共鞭十八<sup>〔マ、イ〕</sup>亭用捨可致事  
但年來小作米可令返事前條同様之事

七〇

御取納遅滞

140

御取納ハ年々十一月晦日まで皆済可致事

若翌正月迄無故して皆済無之者御収納

高拾歩ニ付割一分滯り得者戸ノ廿日一分毎ニ一等

を加へ可申事村役同様之事鞭九までよて許可

申事

七一 内借

141 御藏廻之者御藏之米錢を致内借り者米錢

之高を以竊盜ニ準罪ニ行可申事若懸り之者ニ

あらされハ一等を減し可申事但入墨許之

142 器財之類自分物を以取替りもの同様之事

七二 手越ニ訴状差出る者

〔三三〇オ〕

143 訴状を差出るもの其向々支配頭江差出可申事

手越ニ致し奉行御役人江差出り而も取上申聞

敷り事もし願難相成義も強而手越り

出ルハ、戸ノ三十日但願可相立筋支配頭ニ亭

取押置或ハ支配頭非道之取扱有之を

訴り類ハ可為格別事

七三 無名之訴状

144 無名之訴状投文致り者鞭三訴状之趣取上

沙汰致間敷事

〔三三二ウ〕

七四 不實之事故訴状者

145 不實之妄申出人を罪ニ落さんと壽るもの鞭

刑可被行事を訴りへハ可為追放もし罪死ニ

可相成り義訴り者鞭三十徒一年半

146 若被訴り人御沙汰既ニ究り其罪被行後不

實之事頭連りへハ罪ニ被行り者の刑ニ一等を加へ

可申死刑被行りへハ可為解死人事

147 若二ヶ条訴り節輕事ハ實よて重き方ハ偽

里或ハ一事ニ亭も輕き事を重申出り者

〔貼紙〕

36ヶ枚 以下欠(不完全本)

〔三三三オ〕

天保四癸巳年夏四月写之 小笠原惠則

〔裏表紙見返〕

料

「寛政律」と題する写本の紹介は、これをもって一段落する。弘前市立弘前図書館の目録には、

寛政律

G K 三二・五 二七

資

天保四年(一八三三)写

一冊

半紙 仮和

末尾二五項目三六ヶ条を欠く不完全な写本

と記すように、本文三三三丁表をもって中絶し、その末尾に図書館での整理に際して(岩見氏による整理ではあるまい)付した貼紙にもその旨を記している。

本書の体裁は、縦二四・四センチ、横一七・〇センチの大きさで、半紙二枚を重ねて折ったものを表裏それぞれに当て綴じ、二カ所を紙こよりで綴じる。表紙と同じ紙の本文は袋綴じ三三三丁であり、各面九行を原則とし、文中の朱筆は文字の訂正にとどまる。

表紙の右よりに「寛政律 全」と墨書し、間に朱で「秘事之書」と書き加える。表紙見返しには中央下寄りに「小笠原惠則」と大書する。うら表紙見返しに「天保四癸巳年夏四月写之小笠原惠則」と奥書が見られる。全文を同筆と認めうる。

表紙のラベルによれば、「(主綱)岩見(要目)法度文書六(欄)一〇(冊)全一冊」とあり、本文第一丁表の上端中央の館蔵印に

「岩見文庫 G 六八五」とも記され、これも故岩見常三郎氏収集になる資料のひとつである。

これまでの通り、他本との異同について簡単に触れておく。本書は一貫して、各条冒頭の「一」書きを省略しており、個々の条文を区別するのにやや不便である。項目名の表題を欠くのは、七・一三、条文を欠くのは57・114条、項目・条文全部を欠くのは四九(106・107条)、五六(122条)である。147条の途中から後を欠いているのは既に記した通りである。

朱書は、表紙の書名に添えた「秘事之書」なる文字を除いて、本文中に十五カ所みえるが、いずれも文字の訂正にすぎない。念のため所在を示すと、二ウ二行目「年」、同六行目「流」、四オ四行目「料」、同五行目「貫」、六ウ八行目「通」、七ウ五行目「首」、一二ウ六行目「咎」、一六オ「ゆ」、一七オ六行目「事」、一八オ四行目「之」、一九オ七行目「者」、二五オ六行目「若」、二八オ八行目「五貫」、三二ウ七行目「訴」である。

このたび黒滝十二郎氏から、本年一月に蝦名庸一氏が逝去されたとの訃報をいただいた。故蝦名氏にはこの一連の作業を開始するに際して受けた学恩もさることながら、その後の作業をあたたく見ていただいていたことに厚く謝意を表しておきたい。作業の一段落まで見届けていただけなかったことが残念である。あらためて御冥福を祈る。なお、本稿は大阪経済法科大学昭和六十二年度研究奨励金による成果の一部でもある。

付6 『要記秘鑑』三十三 (一)

弘前藩庁では日記方が津軽藩政の諸事例を分類・編集した『御用格』なる膨大な記録を五次にわたって作成し、その大半が『藩庁日記』とともに弘前市立弘前図書館に引継がれ、保存されている。

しかしながら永久保存のために一切の複写を禁じられており、現地での閲覧以外に利用のすべなく、遠隔地にある者にとっては、一般資料でありながら利用の困難をかこつものとなっている。最近、これの活字化の作業が進められつつあるとの話を伝え聞き、その実現の一日も早からんことを期待している次第である。

ここに紹介する『要記秘鑑』は三橋左十郎定軌が、この『御用格』をもとに編集したと考えられているものである。

その内容は弘前市立弘前図書館の郷土資料目録によれば、次のとおりである。

K二〇九 有職故実 儀式典例 行幸啓(皇室)の項に、左の通り内容が紹介されている。

要記秘鑑 (三橋左十郎) (定軌) 編 K二〇九―二

写 一八冊 半紙 和

註：儀式法令作法その他藩政の事例を類別して年代順に編纂したもの

内容：

第一 公義(御系譜)

第六 諸願 諸伺 諸断 呼取願

第九 御規式(御能御囃子 御祝儀事 御年始御座敷 御料理事 御礼廻御用捨) 御用所(御家老御用人 諸事見分 対客 著服 頂戴物 御城代 大目付御目付 御日記方 書物方 表右筆)

第一〇 御規式別帳

第一一 諸頭(三組頭 諸物頭 御中小性頭御徒頭 御手弓御手筒御手道具頭 組引渡)

第一二 御家中(複仰出 御城廻被仰出 御目見 月並御奉公見習同御免并引取 御紋形 衣類 名改 苗字改組替 次第 御印)

第一三 御家中(湯治 在御暇 駕籠 雪船 幕 月代執 座穢 附添 師役 誓詞 御薬并御医者 供廻并御往来 統御触)

第一四 御家中(養子 縁組 年若=付里方江引取 袖留 前髪執 総髪剃髪 摘髪 諸御礼 杖御免 足袋 御役免

隱居 末期 忌中忌明 家督 申立 御飛脚 登下 御家  
中江戸上方上下道中渡金覺)

第一五 吉事差上物(御役替之部 帰參之部 分知之部

御褒美被下物之部 差上物御定 差上物之部 御賄之部  
他領者より差上物之部 他領者江被下物 御家中并寺社方

分限高調 御家中跡式定)

第一六 御側廻(御側廻 奥通之部 御小納戸 大納戸

坊主方) 御広敷(被仰出之部 御前様御子様方之部 瑤池

院様御前様御行列 御産婦之部 御部屋様并御女中 満佐

姫様御縁組一件 申立之部) 御台所(被仰出之部 御台所

頭之部 吟味役請私役 御料理方 漁師頭 御家具方)

茶之湯次第書

第一九 那方(津輕地形之図 津輕行程記 那方被仰出之

部 郡奉行之部 御代官之部 御家中在宅御触 開発之部

御目見御賞帯刀御免之部 御紋形之部 衣類之部 被下物

之部 漆方并植付物之部 太々神楽之部 藤崎村堰神の由

来 同碑文 同村唐糸御前の由来 乳滝の図)

第二〇 那方(郷村長 イロハ寄郷村帳 黒石平内領郷村帳

青森鯉ヶ沢町其外浦々 東日流郡濫觴并邑里ノ号 十三往

来 岩木山ノ始リ 御領分中道法并駄賃定 上中下村定積

村々駅場江被下金御定 御巡見使廻着ニ付諸勤書 藤崎村  
堰神之由来 如来瀬村杭戸堰神之由来 孝行奇特之者在

割付物代銭御定并雜木杣賃御定 御贖物代米御定 諸品代

米御定 諸事)

第二一 町之部(被仰出之部 町奉行之部 御目見之部

御紋形之部 衣類之部 町年寄之部 御役銭勘定 所々御

役銭并御米納高 町医之部 八幡御祭礼之部 申立之部

牢屋之部 揚屋之部 長吏彈左衛門由緒書 板倉伊賀守掟

状 公義評定所法式并公事訴訟取捌之部)

第二七 山方(山奉行之部 銅山方之部 矢立杉之部 吟

味役 御境伐木之部 材木柁木舞之部) 御武器藏之部

松前エサシソウヤ北蝦夷地御備御武器 浦々諸湊御武器

海岸御固所台場御武器 御印脊旗之図 御武器惣調 御

楽屋御定 御楽屋奉行 御役者之部 岩木川之部 加

勢増人之部 類役加役之部 諸組誓固同並足輕相定候勤所

并不時繰上加入勤所 黒石之部

第三二 御刑法牒(文化御改御刑法定例)

第三三 凶事之部(逼塞閉門之部 蟄居之部 御預者之部

御役下之部 御暇之部 家督之節身上被召上候者者并半知

被下置候者等之部 追放之部 義絶勘当和談之部 一間所

他出差留声高等之部 咎人御登セ之部 同御下之部 入牢  
出牢之部 取退無尽御法度之部 丹後者御制禁之部 銅鉛  
山苦使之部 乞食手江相下候部 大赦取扱之部 御仕置之  
部 公儀御仕置形之部 遠慮諸事之部)

第三四 凶事之部(御印物印判 御出之節間違 御家老御  
用人江無礼 御献上日之丸御進物 諸御礼披露違著服違

御名代御召物間違 御台所廻 諸断通用御請間違 刀鞘走  
慮外 認違遅滞不吟味不心得附心得違御書物 誓詞御飛脚

登 御蔵御鍵湊順違目論違 田方山方屋敷 夜廻養子 諸  
渡物押物御用違 組支配 変鐘失物咎人盜賊御預遠慮關所

評定所 遠慮慎御呵 遠慮日数御定町在之者御追等之節御  
家中遠慮)

第三五 変之部(被仰出 弘前火事江戸御屋敷類焼在浦火  
事 山火事 地震 洪水 出奔 捨子迷子 打捨 大風)

(弘前市立弘前図書館『弘前図書館一般郷土資料目録』  
昭和四〇年)

三橋左十郎について、蝦名庸一氏は『津軽承昭公伝』に  
拠り、

幕末の津軽藩士。慶応四年(一八六八) 函館警備の隊  
長をつとめた。帰藩後、側用人となり明治二年(一八六

九) 用人となった。

と記す(『青森県人名大事典』昭和四四年)。

なお弘前図書館岩見文庫には、もう一組の『要記秘鑑』が所  
蔵されているが、卷三二・三三・三四は欠いている。もっとも  
先の欠巻を補う巻もあるので、同様に目録から必要箇所のみ摘  
記しておく。

要記秘鑑 第三、七、八、一〇〜一六、二三、二四、三五

GK二〇九一

写 一四冊 半紙 和

註・儀式法令作法等の事例を類別して年代順に編纂したも  
の 文化一一年(一八一四)頃までの記事がある(第八、一

〇〜一六、二三は佐野旧蔵本)

内容..

第三 御家(高照靈社御意書 御自筆御書付之写)

第七 公儀(御献上之部 不時御献上之部 御朱印御系譜  
之部 供奉之部 日之丸御船之部 長崎倭物方之部 若君

様之部 御書付之部 御届之部 御願御伺之部 於御国元

鳴物停止普請作事日数御定 諸事之部 近衛様醍醐様之部

武家諸法度 中田御関所之部 公方様御規式御参詣之部

同所々御成御行列之部 越後御検地之部)

第八 御家(御誕生之部) 御子様方 御目見部 御月並部

御縁組部 御家督之部 御隠居所 不時御登城部 御官位

御官名 御承祖部 御養子部 御上下諸事 御靈膳并御精

進 御拜并御配膳部 日光御參詣記 高覽之部 御出之部

御名代御使者之部 善光寺廻著御取扱 他領より使者 御

機嫌伺之部 御逢之部 御逝去之部)

第一〇 御在国(御煤取御規式 大晦日御規式 年頭御規

式 御具足餅御祝儀御規式 御謡初御規式 御謡初御規式

但古來御本当之式江点羽付 雛名御規式 年頭御規式但古

來御本当之式江点羽付) 御留守(御煤取御規式 大晦日

御規式 年頭御規式 雛名御規式 御年始御祝儀御料理并

御能御規式 御発駕御祝儀御料理事并御規式 御著城御規

式 御発駕御規式 御著城御祝儀御料理事并御能御規式

御城中御郭廻諸番所御本当之式 御規式被仰出諸事)

第一 頭方(前掲、略)

第二 御家中(御家中被仰出之部 御城中被仰出之部

御広敷中之口所々御門御定書并留守中勤番之部 所々御門

御条目并御道具之覺 御目見之部 月並之部 御奉公見習

同御免并里方江引取之部 御紋形之部 衣類之部 名改之

部 苗字改之部 組替之部 次第之部 御書出御印之部)

第一三 御家中(前掲にほほ同じ、略)

第一四 御家中(養子養弟養女養妹之部 附嫡孫承祖縁組

之部 年若ニ付里方江引取并養生等之儀 [以下、前掲と

ほほ同じ、省略])

第一五 吉事差上物(前掲、省略)

第一六 御側廻(前掲、省略)

第二三 上・下 町之部(前掲、省略)

第二四 勘定所(被仰出之部 勘定奉行之部 御米方之部

御廻船之部 両替之部 金銀錢譜 御用達之部 御登セ物

御下シ物 押物拾物 御扱物之部 御荷物之部 所々御藏

方之部 四奉行 余米渡之部 知行伎子金給扶持方相当割

第三五 変之部(被仰出之部 両都御屋敷御類焼并弘前火

事 在浦火事 山火事之部 地震之部 洪水之部 大風之

部 出奔之部(以下欠)

(弘前市立弘前図書館『岩見文庫郷土資料目録』その

一 昭和三五年)

このうち、第二一「町之部」については、一九八六年に弘前大学の長谷川成一助教授によって、後半の「長吏彈左衛門由緒書」以下の幕府法を除く全文が『弘前城下史料』上に収録されている(一五一〜二六六頁、北方新社刊)。



また第三二がのちに紹介する文化律の一写本であることはあらためて言うまでもなからう。

このたびは、弘前藩の刑政の実態の概要を把握できる資料の一つとして『御用格』の片鱗を示すこの資料の紹介を試みることにした。

『要記秘鑑』第三三・三四の二冊におよぶ凶事之部の大半は、藩士に関するものが多い。これは原史料の性格によるところが大きく、弘前藩刑法典の適用例は必ずしも多くはない。しかしながら「凶事」という言葉に包摂されるさまざまな項目は、為政者たる藩庁からみた広義の犯罪（不祥事を含めた）および行刑（軽い処分程度を含めた）の具体的事例として貴重であるといえよう。項目によっては特定の典型的事例のみを掲出したものもあり、『御用格』との関係はさらに検討を要する課題でもある。

なお、安永律の制定および内容についても、本書第三三の六五丁裏から七二丁表にかけて記されており、これまで言及されていない貴重な資料である。

凶事之部

要記秘鑑 三十三

目録

- 〔一〕 逼塞閉門之部
- 三 豊居之部
- 六 御預者之部
- 十四 御役下之部
- 十八 御暇之部
- 廿三 家督之節身上被召上候者并半知被下置候者等之部
- 廿七 追放之部
- 卅五 義絶勘當和談之部

〔一オ〕

卅七 一間所他出差留聲高等之部

四十一 咎人御登セ之部

四十四 同御下之部

四十五 入牢出牢之部

五十二 取退無盡御法度之部

五十三 丹後者御制禁之部

五十三 銅鉛山吉使之部

五十六 乞食手江相下候部

五十六 大赦取扱之部

五十六 御仕置之部

七十八 公義御仕置仕形之部

七十九 遠慮諸事之部

〔一〕 逼 塞 閉 門

1 元禄十一年十二月九日

一今日大目付江申渡ル者

関治助などの様ニ閉門ニ而罷有ル面々之近所ニ、万一出火

有之ルヘ而「閉門之家江火懸リ申程ニルヘ、其近所の目

付早速懸ケ付差」圖致し立退セル様ニ可申付ル、自今以後

〔一ウ〕

〔二オ〕

も右之趣ニ相心得罷有ル様ニ、御目付江可申付旨、木村全之助江申遣之、

2 天和二年五月十六日

一渡邊弥五右衛門・池田助大夫弥急度閉門被仰付ル、大門ハすち加へを「打、小門斗閉ル而、夜斗用事相調、尤外長屋まと柵ニ而めんとり」をニ針ニ而志めル事、

一町田斎儀弥遠慮仕ル事、外まとの戸ハ立詰ニ致シくムリを閉ル事、

3 元禄十一年十一月晦日

一寺社奉行山中次郎九郎御目付兩人関次助宅江参、右次助江申渡之覚

於江戸表從御用人御用之儀申渡、大切之繪圖等致持参、於御當地早速可申上儀、不調法之至、日頃之所存相知ルと被思召ル、依之閉門被仰付之、

同十五年七月十日閉門御免、此以後致遠慮罷出ル様ニ被仰付ル、

同廿九日御免、

4 〔七〇〕  
宝永七年八月十三日

一 逼塞之節ハ窓蓋を懸け而くゝりを閉じ事之時斗明  
の様ニ致シ事、

一 門番ニ申付而、用事之外ニ外方之使見廻之儀一切取継不  
申事、

一 一分之用事も昼之内令遠慮、暮以後ひそかに人を出シ  
事、

5 同日

一 毛内安兵衛・高橋作兵衛儀、此度吉岡七兵衛類と申御奉公  
不相勤内作事を致シ、其上表向自身徘徊致シを御

役柄と申合警、罷有言上不仕儀、油断ニ思召、逼塞被仰  
付之、同年十二月十八日 御免、

6 〔七四〕  
正徳四年十二月五日

一 御手廻成田宇八郎妻御法度之衣類を着し、下女ニも下着縮布  
ヲ着せ、若黨袴ヲ着シ召連ゆ段、不届ニ被思召、閉門被仰  
付之、

一同十五日右一名御政法相背ゆニ付、知行被召放之、 〔一ウ〕

7 同日

一 御馬廻組頭杉山勘左衛門妻御法度之衣類着用致他出ゆ段相違  
不届ニ付逼塞被仰付之、

同五年四月十七日御役儀被召放、逼塞御免被仰付、遠慮被仰付、  
五月十六日 御免、

8 〔七四〕  
安永三年四月六日

一 御手廻一戸惣助儀、御役儀相應之禄高被下置ゆ処、不覚悟之  
申立不届ニ付、去ル十日知行永御蔵入之上、御留守居組江御  
役下」被仰付、翌十一日遠慮伺之通被仰付ゆ処、同十四日  
逼塞被仰付ゆ、然処右遠慮之儀頭方心得違不申付ゆ段申出  
ゆ、然ハ其身江」被仰付無之儀申渡之砌、御請之致方神妙之  
至ニ付、逼塞ハ」勿論之儀、遠慮共御免被仰付之、

9 〔七七〕  
安永六年十月十一日

一 御鏡口役勘定奉行手傳松田傳右衛門御側被仰付置ゆ処、思召  
之」筋令忘却、我意ニ相募申出之起と致齟齬、悉皆不埒之  
勤」方不届ニ付、御鏡口役并勘定奉行手傳役被召放、知行被  
召上、逼」塞被仰付之、

右ニ付親類岡本宇内通用人被仰付、有人数四合扶持被下置ゆ、

料

資

家内「無據分ハ格別、下部ハ男女之内老人ニ減方申付之、安永六年十月十一日、同七年五月四日逼塞御免隠居被仰付、悴常藏江五人扶持被下置、御目見以上御留守居支配被仰付之、」  
〔二七〇〕

但此節之剪紙通用人被差遣之、

10 天明元年八月十六日  
〔二七八〕

一御用人樋口弥三郎無調法之儀有之、御役儀被召放、御加増家屋敷被召上、閉門被仰付之、代官町旧宅被下置之、

但通用人蒔苗孫右衛門被仰付之、

一同四年閏正月廿六日閉門之内病死之旨申出之、檢使被仰付之、

同二月朔日弥三郎悴鉄吉儀幼少ニ付忌中御断達儀只今差

上ハ旨毛内弥太八方申出之、閉門中ニ付右御断ニ及不申ハ間

別「紙伺差出ニ不及旨書付相返ス、

同四月廿九日閉門中病死ニ付、御定法之通可被仰付ハ得共、

数代「相勤ル者之儀以、御憐愍知行半知被召上、悴鉄吉御留

守居」組被仰付、慎御免被仰付之、

〔二七〕

〔二〕 蟄居之部

11 天明元年八月十六日  
〔二七八〕

一御留守居組笹森力藏曾祖父勘解由儀、重キ御咎被仰付、其後御免ニ被仰付ハ処、不慎ニ而由緒も無之重キ御役儀之方江出會所致不届ニ付、力藏江御預之上蟄居被仰付、親類たり共對面不致ハ様被仰付之、

12 天明二年二月十九日  
〔二七八二〕

一葛西忠太郎弟左吉御尋御用有之、忠太郎江御預、他出等

急度差留置ハ様申遣之、

同年三月廿九日右左吉儀、家来盜不食議ニ付、亀甲町長之助

ト「申者手負セハ始妹、悉皆未練之致方不届ニ付、生涯兄

忠太郎へ御預之上蟄被仰付ハ、

13 天明五年七月  
〔二七八五〕

一蟄居之族月代取之儀、江戸御日記役江問合セ申遣ハ処、江戸「御」日記ニも留無之、御聞役江申談、公邊御取扱之趣承合ハ之処、」左之通、

蟄居被仰付儀ハ、科右蟄居ニ相究ル儀故、外出面會等ハ不相成ル儀不及申ル、月代之儀ハ、自分愼之儀ニ由、別而剃不申ト」急度致したる訳も無之、牢舎(三才)など格別之儀ニ御座ル、然共」只一通ニ月代取願ハ、恐有之、病養眼病等之申立ニ而月代取」願差出ル儀ハ不苦被仰付由、右之通御聞役申聞由、江戸御日」記役方御用状ニ申来之、

14 寛政二年二月二日

一於松浦甚五左衛門宅申渡之覺

津輕金藏

御自分親内膳儀、無調法之儀有之、先年御咎被仰付由得共、數」年相勤ル儀、其上手柄ヲ被思召、蟄居御免被仰付之、

出座 御目付

15 寛政九年三月七日

一奈良岡市左衛門儀、清水森村在宅之處、行跡不宜、酒狂及度々村中騒動ニ及セ、乱心同様之所為、言語同断法外至極ニ付、身上」被召上、堀五郎左衛門江御預蟄居被仰付、尤先祖旧功被思召、格」段以 御憐愍、悴永次郎江新ニ百石下置、御留守居組被仰付、

但此節大目付出座ニ由得共、病氣ニ付御目付出座有之、

享和三年八月八日奈良岡永次郎申出、親市左衛門儀堀五郎」左衛門江御預蟄居之處、私家屋敷所持住居ニ付、御預被仰付」度儀、願之通、

〔三ツ〕

16 寛政九年三月七日

一下山兼次郎儀入学之上学寮住居之處、言行不慎、其上業事

不相勤、且又学寮住居諸生江惡事を進、其上甚敷惡事有之、不届至極ニ付、親源次郎江御返蟄居被 仰付、

右ニ付親源次郎儀遠慮伺之通、同十三日 御免、

17 寛政十年九月四日

一御家老牧野左次郎、知行之内五百石被取上、蟄居被仰付、悴徳一江家督被仰付、御手廻一番組被仰付之、

同十二年三月四日蟄居被仰付、御定も有之、他之面會致シ」ル段相聞得、不慎之至ニ由、以采急度相愼ル様被仰付之、

同五日右ニ付徳一遠慮伺之通、同七日 御免、

享和三年三月十五日左次郎病死ニ付、夜ニ入葬送仕度儀、伺」之通、

料 18 寛政十年五月廿四日

一御用人赤石安右衛門不届之儀有之ニ付、知行被召上、御役御取放之上、「蟄居被仰付、忤此次郎江新ニ五両三人扶持被下置、以下支配役下」被仰付之、

資

19 同日

一御持筒足輕頭菊池寛司儀、常々姦智を専ニ致シ、自分一己之「功」を競ヒ、御為と名付、御国高を不察漫ニ聚斂<sup>〔マツ〕</sup>を事とし、一牀之不斗、御為下々難儀ニ及セ、其上支配取扱方依怙偏頗甚敷背御作法、且御奉公之筋致忘却、重々不届至極

ニ付可被處殿刑比得共、深キ以、御憐愍、知行御取上御役儀被召放、蟄居被仰付、忤小刀司江新ニ五両三人扶持被下置、御目見以下御留守居支配被仰付之、

同日勘定奉行笹森小大夫・相馬儀助・古川仁左衛門、右同様被「仰渡蟄居、忤共右同断被仰付」

寛政十一年三月廿日古川仁左衛門病死ニ付、夜ニ入葬送致度、「伺之通、

20 寛政十一年三月晦日

一一八

一勘定奉行小倉作左衛門儀、勤方不應、御意ニ付、御役儀被召放、「御給分被召上、蟄居被仰付」

但作左衛門儀ハ隠居致比処、勘定奉行再役被仰付、

同十二年三月四日他ノ面會致シ不慎ニ付、急度慎比様被仰

付比、

享和二年四月廿九日小倉藤左衛門方家屋敷繰替ニ付引移比

節、「蟄居之親岡左内方江引取之儀申出、難被仰付比、夜

ニ入密ニ簞」簞ニ而引移比様被仰付比、

文化八年十月廿二日作左衛門蟄居、御免、

21 寛政十一年三月晦日

一山奉行松田常藏儀勤方不應、御意ニ付、御役職被召放、御給分「被召上、蟄居被仰付比、忤定次郎江五人扶持被下置、御

目見以下」御留守居支配被仰付比、

享和三年三月五日松田定次郎儀、御呵之親江添心之儀不宜、

呵可申付旨、御留守居組頭江申遣之、同日定次郎、御免、

文化八年十二月廿二日常藏蟄居、御免、

22 寛政十一年七月八日

一 御家老津輕多磨伴永孚儀、高八百石之御役知被下置、御家老

職「相動ゆ処、勤方不應、御意、蟄居被仰付ゆ、」

文化六年十二月五日蟄居、御免、他出御差留之上、親類對

面不苦「ゆと被仰付ゆ処、文化八年十月廿二日他出御免被

仰付ゆ、」

23  
〔八〇六〕  
文化三年四月十三日

一 高七十石二人扶持御役料五十俵外ニ三十俵二人扶持動料江戸

勘定「奉行落合新次郎、高百石四人扶持御役料五十俵同役見

玉武七、」

右同人共無調法之儀有之、身上被召上、於一間所蟄居被仰付、

御国下「被仰付之、」

一 同年七月三日於揚屋御徒目付申聞之覚

落合新次郎 見玉武七

其方共無調法之儀有之、御国下被 仰付ゆニ付、此度浪岡組

相沢村江「被差遣、於同所蟄居被仰付之、」

申聞人 御徒目付

附添御徒目付 足輕目付 大組諸手足輕之内四人 町同心四

人  
〔五才〕

一 右同人共儀、明日於揚屋、御徒目付申聞之上、浪岡組於相沢

村蟄「居被仰付ゆ間、村々之者番人致ゆ様、」

一 賄之儀ハ同村庄屋方ニ而取扱ゆ様、

一 衣類夜具等申出ゆハ、見斗相渡ゆ様、右品之儀ハ勘定奉行

申合ゆ様、」

一 右番人心得之儀ハ、刃物何品ニ不寄、相渡不申ゆ様、筆墨紙

望ゆ而も「是又相渡不申ゆ様、何方方好之者参ゆ而も全對面

不致セゆ様、」

一 脇方文通等致ゆ者有之ゆハ、同人共江不遣、封之假ニ而各江

差出、各「より御用所江可被差出ゆ、」

一 病氣等之節、醫者之儀申出ゆハ、御用所江相違、差圖を受

ゆ様、」

一 変之節立退ゆ様、

右之通被仰付ゆ間、此旨可被申付ゆ、猶又諸事森内左兵衛節

之通「被仰付ゆ間、勘定奉行申合、差文無之様可被申付ゆ、」  
〔御用心〕  
按庭半兵衛

七月二日  
郡奉行中

一 同人共儀賄之儀ハ、同村庄屋方ニ而取扱ゆ様申付ゆ、

一 衣類夜具等申出ゆハ、見斗相渡ゆ様申付ゆ、

右同人揚屋方相沢村迄差送ゆニ付、錠前駕籠式挺、駕

籠昇小人等可被申付ゆ、諸事森左兵衛節之通被仰付ゆ而、郡

奉行申合、夫々差支無之様可被申付旨、勘定奉行江申遣之、

文化六年十二月五日右蟄居御免之上、弘前徘徊御免被

仰付、同十九日御養扶持三人扶持ツ、被下置〔五ウ〕、其後五兩

三人扶持ツ、被下置〔五ウ〕、帰參被仰付、委細ハ帰參之部ニ有

之、

享和三年森内左内於川原平牢居被仰付〔一八〇三〕ニ付、委細入牢之

部ニ有之、

〔三〕 御預者之部

24 天和二年十二月廿七日〔一六八八〕

一 惣而御預ケ者之儀、一類之内江預〔一六八八〕儀、無用ニ可仕由被仰付之、

25 正徳元年十月三日〔一七一〇〕

一 於評定所大目付申渡之覚

石山喜大夫

出座 四奉行

御目付

預り人

岡 半兵衛

其方儀日頃不行跡之段、達 御聴、御役儀并御知行被召放、

一 石山喜大夫家屋敷被召上、

一 同人家財之儀妻子ニ被下置、尤妻子之儀ハ石山沢右衛門方江引、取セ可申事、

岡半兵衛江申渡之覚

此度石山喜大夫儀御預ケ被仰付間、随分無油断相守様可

申、付、喜大夫親類縁者方之通路一切為仕間敷、若左様

之、容躰及見聞ハ、押置書通ニハ、封印を以、大目

付迄差出、可申、緩セ之段相聞得、而者可為越度、尤其

身侍之仕形ニ、不似儀有之、取押ニも手餘ハ、打

捨ニ仕、而も不苦、右之、通心を付急度相守様可申、

一 岡半兵衛覚書ニ而山口勝右衛門迄申立、今度喜大夫御預

ニ付、相伺儀、御自分様迄可申上、月番御用人江可

相伺、

一 喜大夫懐中毛拔鏡此方江受取置可申、差當右之段申上

以外之儀ハ明日相伺可申、外ニ急ニ相伺儀差當無御座、

明日追而相伺可申、半兵衛受取置可申、

一 岡半兵衛儀御用有之段申遣於私宅、御用之儀ハ於評定所

大目付可申渡間、直ニ評定所江参様ニと申遣、



一御預者之儀ニ付乗物繩網之儀勘定奉行江申付、乗物

昇之儀ハ町小使申付、町奉行江申遣之、

一御預者路次中付添足輕六人大組諸手月番者頭江申遣之、〔六ウ〕

尤印羽織着用仕セ今日七ツ時過評定所江差越、様ニと申遣之、

町奉行并御目付差圖次第相勤、様ニとは又申遣之、

一石山喜大夫刀脇差小人ニ持セ御徒目付足輕目付附添、而半兵衛江」相渡セ申、

一道筋之儀ハ大手之御門を除、様ニと申付、三ノ丸 御屋敷裏

通り」東御門出、寺町、在府町江罷通、様ニと申付之、

一同五日岡半兵衛書付之覚左之通、

石山喜大夫就御預伺之覚

一朝夕之揚枝望、ハ、相渡、儀如何可有御座哉、 兼而無用ニ

申付、

一行水望、ハ、可為仕可申哉、 月ニ二三度斗申付、

一火鉢出、儀如何可仕哉、 極寒等は時折先延引ニ申付、

一たはこ望、ハ、給セ可申哉、 罷成間敷旨申付、

一硯料紙望、ハ、可遣哉、 兼而無用ニ申付、

一朝夕食物之節拙者儀同座仕給セ可申哉、 夫ニ不及由申付、

一朝夕之食事輕一汁二菜位ニ給セ可申哉、 隨分輕ク一汁一菜

ニ申付、

一鼻紙袋巾着致所持、間請取置可申哉、 只今迄延引ニハ早速受取置、

一書物等願、ハ、見セ可申哉、 末々ハ格別、當分見合、様、

一衣類一類、方遣申度由申、ハ、請取相渡可申哉、

太切之至極と存、ハ、万一針等ニ而も入可申哉、 添状等之儀

無心元、ハ、難相渡事ニ、ハ、万一之事、ハ、越度之旨申付

之、

一大変之砌召連立退、儀、乗物繩網共ニ兼而拝借仕置可申哉、

乗物繩網共ニ申付、 〔七ウ〕

一喜大夫病氣之節昼夜共ニ醫者ニ見セ、儀前廣御断可申哉、

尤急病之節如何可仕哉、

其節ニ至可相伺、急病之節如何可仕、哉之事、

一火事地震之節召連立退可申、哉、右之節何方江立退可申哉、

見斗障無之方江召連可立退旨申付、

一右御預ニ付、火事地震其外大变之節、私儀寄場江相詰

申儀如何可仕哉、 不罷出、

一御寺江参詣ニ参、儀如何可仕哉、 不罷出、

一自分参詣之儀并他出之儀如何可仕哉、 差扣可申、

一喜大夫御預之内、私一類共私方江之出入之儀如何可仕哉、

御預、ケ人江同座仕七間敷、勝手ニ而逢、ハ、出入不苦、

座に故、「私正之添番被仰付度旨申出得共、難申付也、

一喜大夫病氣之節ハ奉伺、御差圖次第可仕也、急病之節先達而

申」上は松山道怡・松本剛説兩人と申上出得共、若差合申也

ハ、中村春庵・粕谷全哲・長内三益、右五ヶ処之内江可申

遣と奉存也、此段奉伺旨」申出之、承届、

〔七二二〕  
26 正徳二年二月十二日

一石山喜大夫江申渡之覺

其方儀、去冬御預被仰付也節、於評定所御意之趣大目付

申渡也処、御請無調法成申上様、甚御機嫌不宜也、依之

切腹被仰付之、

一岡半兵衛宅ニ而喜大夫御仕置之節

檢使 御徒頭 粕谷彦四郎

立合 御目付 黒滝助右衛門

介錯 御中小性 白取勝太夫

御徒目付 逢坂六郎右衛門

足輕目付 吉崎幸次右衛門

一岡半兵衛申立也ハ、石山喜大夫今晚切腹被仰付也、死骸并同

人大」小寝卷等如何可仕旨申立也ニ付、親類宿カ片付ニ成

共、此方」差圖ハ難成也間、勝手次第ニ致也様ニと申付之、

一小笠原作右衛門申立也ハ、石山喜大夫切腹被仰付也、私儀喜  
大夫ニハ」養父家督之方之從弟ニ而御座也、御奉公遠慮ニ而  
も可仕哉」之旨申立也ニ付、則遠慮申付之、

一石山沢右衛門申立也者、石山喜大夫儀切腹被仰付也、私儀御  
奉公」遠慮可仕哉之旨申立也ニ付、遠慮申付之、

一七戸五大夫申立也者、石山喜大夫儀切腹被仰付也、拙者儀母  
方之從」弟御座也、御奉公遠慮仕遍く哉之旨申立也ニ付、遠  
慮申付也、

一外崎喜六申立也者、石山喜大夫儀切腹被仰付也、私母方之從  
弟ニ」御座也間、御奉公遠慮可仕哉之旨申立也ニ付、遠慮申  
付之、

一片岡九左衛門申立也者、石山喜大夫御仕置被仰付也、私妻た  
め」甥ニ御座也、御奉公遠慮之儀申立也ニ付、不及遠慮旨  
申渡之、

〔八才〕

一戸田次左衛門申立也、石山喜大夫切腹被仰付也、喜大夫母江

父方之從」弟ニ御座也、御奉公遠慮之儀申立也ニ付、不及遠  
慮旨申遣之、

一小野甚右衛門申立也者、石山喜大夫切腹被仰付也、私儀喜大  
夫ニ相掣ニ」御座也、御奉公遠慮之儀申立也ニ付、不及遠慮  
旨申付之、

一

一

一

一戸田勝十郎申立ル者、石山喜大夫切腹被仰付ル、喜大夫母江父方之レ從第ニ御座ルニ付、遠慮之儀申立ルニ付、不及遠慮旨申付之、レ

一久保田長吉申立ルハ、石山喜大夫切腹被仰付ル、喜大夫妻私叔母レニ御座ル、私家方遣ル者之儀ニ御座ル、尤子共無御座ル、引取レ之儀奉願旨申立ルニ付、申立之通引取ル様ニ、山口勝右衛門江申遣ル、レ

正徳元年十一月廿一日御中小性川口瀬左衛門儀、兄石山喜大夫レ無調法ニ付御暇被遣之、

27 正徳二年正月廿八日

一武田源左衛門数年之勤方不應 御意ル得共、御用捨テ以被召仕ル處、レ今度上方之勤方旁以不届ニ付、御知行家屋敷共被召上、笹森レ勤テ由左衛門江御預被成ル、

同人伴武田治部左衛門、右ニ付、高屋半左衛門江御預、同年二月十二日親子レ共御仕置被仰付ル、

28 寛保元年六月廿六日

一御小性組當田場左衛門、堅キ御法度を相背キ、無挑灯ニ而町を罷通、其上致兇議ル者刃傷、且又町江押込、町中騒シ、法外之レ〔八ウ〕

致方共、不届ニ付、御預被仰付之旨、於評定所大目付申渡之、一於喜多村監物宅、御留守居支配笠井傳右衛門江申渡ル者、當田場左衛門儀不届ニ付、其方江御預被仰付之、

一當田場左衛門評定所江罷越ル節、途中見レ隠ル、町同心式人程附レ添參ル様ニ、手紙ニ而青木兵右衛門江申遣之、

一同廿七日傳右衛門申立ル者、此度御預之囚人昨夜御會所并途中共ニ不心得之事共萬事有ル得共、人柄と申、旁能様ニ挨拶仕、漸々レ宿元迄同道仕ル、然ハ余程様子六ヶ敷相見得申ルニ付、自然之儀如何トレ奉存ル、夜中番人加勢被仰付度奉伺旨申出之ニ付、足輕屋式人夜レ三人申付之、

一朝夕給仕之儀、私家来如何奉存ル間、昨晚方今朝迄番人足輕江申ル付ル、此段如何可仕ル哉、奉伺旨申出之、足輕給仕申付之、レ

一同人宿方文通諸遣等又者對面之儀願ルハ、如何可仕ル哉、且又たはこレ好申ルニ付、昨晚迄私心得を以、番人私共ニ附添たはこ遣出し申ル、レ以後之儀如何可仕ル哉、奉伺旨、申出之通、用無用ニ可致旨、并たはこレ儀も無心元様子ニルハ、無用可致旨申遣之、レ

右之通申出ルニ付、足輕番人屋式人夜三人申付ル而、今老人之儀、一大組諸手物頭江手紙ニ而申遣之、

料

資

一 同廿八日御留守居組西館大七江御預替被仰付之、  
 一 七月十九日御留守居組戸田八郎右衛門江御預替被仰付之、  
 一 十月廿日御馬廻古川儀兵衛江御預被仰付之、  
 一 同廿七日場左衛門相煩レニ付、町醫之儀、儀兵衛方伺申出  
 之、  
 〔九才〕

一 十一月三日於評定所場左衛門江申渡之覺、

其方儀、致酒狂、當六月於土手町町を騒セ、法外之致方、  
 乱氣同然之儀、不屈之至り、依之御給分被召放之、

申渡 大目付

出座 四 役

御目付

兩目付

町同心

一 當田場左衛門評定所江預り人附添罷出レ節、大小持セ罷出、  
 申渡相濟レ門外江罷出レ時分、大小渡遣レ様可致レ、尤場左  
 衛門儀、宅江不参、直ニレ何方江も引取レ様可申付旨、大目  
 付へ申付之、

一 場左衛門親類御馬廻与力三浦次郎兵衛、於評定所大目付申渡  
 小者、レ場左衛門屋敷取仕廻、早速今晚中屋敷奉行江相渡レ  
 様、尤敷物等レ迄取散シ不申レ様申付之、

29 〔七四二〕  
 寛保二年十月十九日

一 隈部伊織ハ無調法之儀有之、御馬廻組頭西館字膳方江御預被  
 仰付之、右ニ付早道小頭老人、早道之者三人、夫々御預被仰  
 付之、  
 〔九才〕

同年十二月九日於宇膳宅ニ切腹被仰付レ、委細御留有之、  
 右早道レ四人入牢被仰付之、

30 〔七四七〕  
 延享四年三月廿九日

一 於竹内源大夫宅申渡之覺

紋太從弟 滝川藤九郎 〔九才〕

御留守居支配蒔苗紋太儀、致乱心レニ付、御給分被召上レ、

親類申合、見継、外江出シ不申レ様可致レ、

出座 御目付

但右紋太儀、乱心ニ而氣荒ニ罷成レニ付、町同心願申出  
 之、同心四人、レ警固老人差遣召取レ段、申出レニ付、右  
 之通被仰付之、

一 同年四月廿七日藤九郎申出レ、蒔苗紋太儀先月廿九日晚方私  
 方江引取置申レ、先達而被仰付レニ〔七〕一類中申合可仕旨被仰  
 付、何レもへ相談仕レ得共、誰引取可申と申方無御座レ而、  
 迷惑レ仕罷有レ、然ハ私儀来月高岡在勤順ニ御座レ、右紋太

留」守中差置ハ儀、無人之私迷惑仕ハ、一類之内誰江成共被仰」付引取申ハ様被仰付度旨申出之沙汰難成ハ、先達而被仰付」ハ通、一類申合見継申ハ様可致旨、申遣之、

31 〔二七六三〕  
宝曆十三年八月廿一日

一大目付田村源太兵衛儀、御尋之御用有之、高屋富太郎江御預被仰付ハ、

一同日富太郎申立ハ、源太兵衛儀、持病相勝不申ハ様子ニ御座ハ、醫者中私宅江罷越ハ様被仰付度旨申出之、手塚支通・粕谷針齋申付之、

一同年九月十五日富太郎申立ハ、源太兵衛觀音經一晚仕度由願、申口不苦御儀ニ御座ハ、可被仰付ハ哉奉伺旨申出之、伺之通申付之、

一於評定所大目付申渡之覚

菊池源太左衛門

田村源太兵衛儀、重科ニ付、知行被召上、其方江御預被仰付之、〔二〇七〕急度押込置ハ様被仰付之、

田村源太兵衛

其方儀、當夏京都江無筋之儀共訴申出之趣、逐一達

御聽、言語同断不屈ニ付、急度御糺、斬罪ニも可被仰付ハ

所、必竟乱心之所為ニハ条、以御憐愍、知行被召上、菊

池源太」左衛門江御預被仰付之、

申渡 大目付

出座 四奉行

御目付

兩目付

附添 兩目付

足輕目付

一於同所大目付口達之覚

高屋富太郎

田村源太兵衛儀、此度菊池源太左衛門江御預被仰付ハ間、左様」可相心得ハ、

〔二七六六〕  
明和三年正月十九日

一菊池源太左衛門申出ハ、田村源太兵衛儀只今病死之旨申出之、檢使」伺之通被仰付之、

32 〔二七八六〕  
天明六年正月十五日

一浪人三上銳助と申者、御尋〔二〇七〕有之ハニ付御馬廻館山兵十

郎江御預、他出不致ハ様申付旨申遣之、

同年二月廿六日

〔二〇七〕

資料

一右鏡助儀常々不行跡、其上人品不似合不宜出會等致シ由段、相聞得由、不届ニ付、弘前五里四方追放被仰付之、尤家屋敷家財ハ一母江被下置之、

33 寛政元年十一月十日田村兼次兄鉄弥儀、御僉議之筋有之〔一七八九〕

ニ付、兼次郎江御預被仰付之、

同十七日田村兼次郎申出由、兄鉄弥御僉議之筋ニ付御預被仰付由間、「御用席江罷出由節ハ、隠居之儀ニ付、羽織斗着セ可申哉、私儀も蒙」御不審罷有由得共、御用席江罷出由節ハ、附添罷出可申哉、親類」一統儀絶ニ付、此段申上旨、伺之通申付之、

34 寛政二年四月廿九日〔一七八〇〕

一佐田長左衛門弟直之進儀、度々不法之儀有之ニ付、兄長左衛門江御預」被仰付之、

五月二日右ニ付長左衛門遠慮伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、

35 享和二年十月十六日〔一八〇二〕

一木村寛吾弟権市不行跡ニ付、兄寛吾江御預被仰付由ニ付、同

十七日寛吾遠慮伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、

36 享和三年閏正月廿九日〔一八〇三〕

一御馬廻成田運右衛門勘當之忤疑敷ニ付、親連右衛門江御預、他出差留被仰付由、  
〔一才〕

黒瀧長左衛門忤御預取扱

37 享和二年十月十六日〔一八〇二〕

以手紙致啓上由、御用之儀有之由間、黒瀧長左衛門今晚七ツ時」私宅江相話由様、此旨可被仰付由以上、

〔御馬廻組〕 西館字膳様  
〔御用人〕 毛内有右衛門

一於毛内有右衛門宅申渡之覚

黒瀧長左衛門

其方忤幸藏儀、常々不跡之旨相聞得由間、御中小忤退役之上、其方江御預、他出差留被仰付之、

出座 御目付

一今晚七ツ時於私宅申渡之御用有之由間、各内老人出座可有之由以上、

御目付中 毛内有右衛門

以手紙致啓上由、今晚於私宅申渡之御用、只今相済

申由、此段申上由以上、

津 頼母様

毛内有右衛門

享和三年十月十三日

一於御用人須藤五郎大夫宅申渡之覚

以下支配笠井兼藏名代 工藤助次郎 (二一〇)

笠井兼藏親カ還右衛門儀、先年未練不法之儀有之ニ付、御給分

被取上、兼藏江新ニ五人扶持被下置由ニ付、急度可相嗜処、

言行不レ嗜隨意之者ニ而、先頃家内及渴命由儀、兼藏方申出

ニ付、頭方レより見分差遣由処、其方親還右衛門儀不法之申

出有之、不憚レ上を所為度々ニ及、殊ニ御役務筋迄色々致

誹謗由旨相聞レ得、不屈至極之者由得共、以 御憐愍、還右

衛門儀親類成田レ吉太郎江御預、於一間所蟄居被仰付之、

尤兼藏并外親類共レ急度見繼被仰付之、

一於同所 成田吉太郎

笠井還右衛門儀無調法之儀有之、其方江御預、於一間所蟄居

被レ仰付之、尤兼藏并外親類共急度見繼被仰付之、

一以手紙致啓上由、申談由御用有之由間、武田弥学・唐牛甚右

衛門儀今レ晚八ツ時過私宅江相詰由様、可被 仰付旨、山田

武田弥学・唐牛甚右衛門心得、左之通、

一笠井還右衛門儀、成田吉太郎江御預、一間所江蟄居被仰付由

間、大小取レ押、錠前駕籠江乘セ、途中隨分敵重ニ附添罷越

由様、

一右大小ハ両目付封印之上、悴兼藏江相渡由様、

一吉太郎方一間所出來無之内ハ、駕籠之儘ニ而差置、老間所江

押込置由処ニ而、吉太郎江引渡由様、

一駕籠之儀ハ勘定奉行江申付置由間、申合由様、

右之通可被相心得由以上、

一以手紙致啓上由、御城代与力成田吉太郎江笠井還右衛門御預

之上レ於一間所蟄居被仰付由間、諸失却も可有之由ニ付、右

御預中二人扶レ持被下置由、此旨可被仰付旨、津軽外記江申

遣之、

一以手紙致啓上由、笠井兼藏親還右衛門儀、御城代与力成田吉

太郎江レ御預之上、於一間所蟄居被仰付由ニ付、還右衛門扶

持方、兼藏方レより差遣、諸事朝夕見繼方急度被仰付由間、

此旨可被仰付旨、沢レ与左衛門江申遣之、

同十五日

一成田吉太郎還右衛門 申出由、笠井還右衛門儀、私江御預、親類見繼

被仰付、一昨レ夜、武田弥学・唐牛甚右衛門并両目付・町同

心・諸組之内附添、私方江引取、「一間所出來不申ニ付、駕籠之儘ニ而座敷江差置、附添罷有ハ處、「自害致ハ旨、附添之族々申聞ハニ付、右之段申上置ハ處、只今落命」仕ハ間、檢使見分之上取片付被仰付度旨、伺之通、足輕目付罷」越、見分之上、死骸別条無之ハハ、片付ハ様、尤死骸之儀ハ悴兼藏江」引取片付ハ様被仰付ハ間、足輕目付罷越ハ様、大目付へ申遣之、吉太郎江ハ」津軽外記与力ニ付、同人江申遣之、兼藏頭江も死骸引取ハ様可申」付旨申遣之、

同日

一唐牛甚右衛門・武田弥学申出ハ、一昨十三日笠井還右衛門儀成田吉太郎江」御預被仰付ハニ付、私共并兩目付・町同心・諸手大組足輕同心ニ而、夜八ツ時」過、還右衛門宅江罷越、夫々挨拶之上、大小受取、兩目付封印仕セ、笠井」兼藏病氣ニ付、名代工藤助太郎江相渡申ハ、夫々還右衛門駕籠ニ」入、御渡之錠前メリ付、右之人数附添、吉太郎江罷越ハ處、一間所」出來迄之内、右駕籠メリ之假ニ而座敷江差置、昼夜附添」罷有ハ處、昨十四日夕七ツ時過、駕籠之内ニ而切腹仕ハ旨、同人挨拶ニ御座ハ得共、錠と相分不申、殊ニ強勢之者ニ付、メリを取不申」罷有ハ處、昨夜ニ至リ、右駕籠之内ニ而、狂氣同様之躰ニ相成ハニ付、「与得吟味仕ハ處、懐劔

ニ而切腹仕罷有ハ旨申出達、」

39 享和三年十月十三日

一於評定所御目付申渡之覚

以下支配 唐牛伊八郎

其方儀、言行不慎ニ付、御咎も被仰付ハ得共、我意致増長、一向可」相嗜所存も無之、反而悪者寄合、雜説等申觸、不届至極、」依而御給分被召上、永之御暇被下置、尤親類戸田久太郎江御」預、一間所江押込置、親類共見継被仰付之、」

申渡 御目付

出座 四奉行

御目付

兩目付

町同心

附添 兩目付老人ツ、

大組諸手足輕之内二人

町同心二人

〔二三才〕

一於評定所大目付申渡之覚

御馬廻 戸田久太郎

唐牛伊八郎儀、不行跡増長ニ付、永之御暇被下置、其方江御預」一間所押込置、親類共見継被仰付之、



申渡 大目付  
出座 四奉行

御目付

両目付

町同心

一以手紙致啓上レ、唐牛伊八郎儀ニ付、御用之儀有之レ間、戸田久太郎レ儀、今晚八ツ時過私宅江相詰レ様可被仰付旨、須藤五郎大夫より「棟方作左衛門江申遣之、

一戸田久太郎儀、私宅江呼レ儀而、御用之儀ハ於評定所大目付申渡レ間、「是ハ直ニ同所江相詰レ様、口達ニ而申演之、

唐牛伊八郎江附添両目付江心得之儀、左之通、

一伊八郎儀、於評定所申渡相済レハ、同人大小、両目付封印之上、直ニ小人ニ「持セ様、伊八郎儀ハ同所ハ直ニ駕籠ニ乗セ、途中嚴重ニ附添罷越、」戸田久太郎方ニ而一間所御寄建被仰付レ間、若出來残り有之レハ、出來レ之内、右駕籠之俣ニ而附添、一間所御取建江押込レ所ニ而、久太レ郎ハ引渡、其節右大小同人江相渡レ様、右駕籠之儀ハ勘定奉行江レ承合レ様、

一附添之面々、今晚斗町賄申付レ、右之通相心得レ様、

但此書付大目付ハ相渡、

〔一三三〕

40 〔一八〇四〕  
文化元年八月廿二日

一小笠原金次郎ハ拝領屋敷江引移可申処、実父御預ニ付、引越之節山駕籠ニ而、夜ニ入、引取、願之通之事、

41 〔一八一〕  
文化八年七月廿日

一御持筒足輕小田桐吉藏申出レ、原田忠作女房その儀、離縁之上、「右吉藏江御預被仰付レ得共、小給ニ而久々預レ而ハ難儀ニ付、その儀縁」談御免被仰付度、願之通申付之、

〔四〕 御役下之部

42 〔一七三三〕  
享保十八年十二月十九日

一於評定所御目付申渡之覚  
代官黒瀧嘉右衛門・富岡甚藏・古川勘兵衛・清野伊兵衛儀、御「収納夫喰米等、不埒之致方有之ニ付、代官役被召放、御目見以下御留守居支配被仰付之、

43 〔一七四九〕  
寛延二年三月十六日

一御目付奈良岡市左衛門儀、先達而御役誓詞相勤レ節、判形致

料

〔四才〕方」不宜、其上右之儀ニ付遠慮伺之儀も、再三龜抹成儀共有之、無」調法被 思召<sub>レ</sub>、依之御役儀被召上、御手廻組入被仰付之、」

資

44 宝曆五年正月廿六日

一 代官成田甚左衛門、當正月二日御礼登 城之節、刻限遅成、御礼」相濟<sub>レ</sub>後罷出、半途<sub>方</sub>罷帰、直ニ御礼廻致<sub>レ</sub>、不届ニ付遠慮申付之、」

同年二月十三日大組足輕被仰付之、

45 明和二年十一月廿六日

一 御徒目付成田孫之丞、御役筋も違<sub>レ</sub>処、度々致酒狂<sub>レ</sub>ニ付、御給分」半減被仰付之、 御目見以下御留守居支配被仰付之、

46 安永九年八月廿日

一 御小性組小屋小次郎、病身ニ付御手廻江掃番被仰付之、同廿一日遣」慮伺申出之、不及遠慮旨被 仰付之、

47 天明二年八月三日

一 御留守居組高瀬八九郎儀、無調法之儀有之、半知被召上、

御目見以上御留守居支配江御役下被仰付之、右ニ付遠慮、伺之通」被仰付之、但門前神輿通御ニ付、御沙汰之上同十三日御免、」

48 同年十一月廿九日

一 勘定奉行石郷岡徳左衛門、御側通江罷出<sub>レ</sub>儀、御用捨被仰付<sub>レ</sub>旨」申遣之、

但安永九年六月九日於 御前、別御用被仰付、何<sub>レ</sub>之役所江も罷出」<sub>レ</sub>儀被仰付之、十二月二日右ニ付遠慮伺之通、

同六日 御免、」

49 天明四年八月十三日

一 御米方勘定小頭唐牛平大夫、去年大凶作ニ付、當年出作植付相減、出石治定不相知内、造酒方之儀、伺も致<sub>レ</sub>須酒屋共江口遣」書ニ而申付<sub>レ</sub>儀、支配違と申、不届至極ニ<sub>レ</sub>、必竟一己之事のみニ」拘り、御太切之御場合も勤弁無之儀、重々不届ニ付、勤料被召上、」御目見以下御留守居支配被 仰付之、右ニ付遠慮伺之通、九月七日御免、但八月廿日 御入部ニ<sub>レ</sub>得」共、御免無之、

一 右ニ付御米方御馬廻格勘定小頭對馬宗左衛門以上支配被仰付

之、」

一御米方勘定小頭杉沢忠八勤料被召上、 以上支配被仰付之、  
一御米方勘定小頭加勢勘定人且代吉藏、 右ニ付以下支配被仰付  
之、」

右何連も遠慮伺之通、 九月七日御免、

50 〔一七八五〕  
天明五年九月十九日

一御米方勘定小頭浅利七郎次、 表小頭江引取被仰付旨、 申遣之、  
右ニ付同廿日遠慮伺申出之、 不及遠慮、

51 〔一七八六〕  
天明六年十月九日

一深浦町奉行申立、 同所町同心警固和嶋安兵衛、 名主上田屋  
多十郎「酒宴之上口論仕、 町内騒セ、 無調法之段、 恐入  
奉存、 得共、 同人」儀、 日頃実貞ニ相勤、 者ニ御座、 間、 以  
下支配江掃番被仰付度」〔一五〇〕  
之旨、 申立之通、

52 〔一七九二〕  
寛政四年三月九日

一御留守居組齋藤弥七儀、 去十一月醉狂ニ而、 棟方常次郎・工  
藤永吉江「手疵為負、 付、 格段以 御憐愍、 御給分之内俵  
子拾俵被」 召上、 御目見以下御留守居支配被仰付之、

出座 御目付

但出座之儀ハ天明二年八月三日高瀬八九郎御留守居組方

御目見以下御留守居支配被仰付、 出座大目付ニ、 得  
共、 同人」儀ハ百石取ニ付、 右之通被仰付、 宝曆五年五  
月十三日小給之「御留守居組山川次郎大夫儀御役下之節、  
御目付出座ニ付、」 右格ニ而此度も御目付出座申付之、

53 〔一七九三〕  
寛政五年二月十八日

一木村友藏儀、 本家之甥木村万之助御役下ニ付遠慮伺申出之、  
御發駕前御用多ニ付、 格段之御沙汰を以、 御用捨、

54 〔一七九六〕  
寛政八年十月廿六日

一御中小性格勘定小頭三浦忠太郎、 勤方不屈ニ付、 御目見以  
下御「留守居支配被仰付之、

但明和七年八月十三日御中小性格代官對馬七郎兵衛以下支  
配」被仰付、 手紙ニ而相濟、 此度も手紙ニ而相  
濟、」 〔一五〇〕

55 〔一八〇九〕  
文化六年五月廿日

一於竹内衛士宅申渡之覺 長柄奉行格那奉行 野呂助左衛門

其方儀、去當年大罽組乳井葉師堂兩村山論之儀、那奉行

引受之扱向ニ付、其方右役之儀別而始未取メ扱可致処、必

竟「近來同役不和合ニ而、諸事熟談無之、區々之取扱故、

支配之者」共一致不致、尚又御用向齟齬之儀而已有之、旁

等閑之処より、「奸曲之者共色々手段取巧、浮言を申觸、

人氣を騒シ、無智」之百姓共疑惑不法之願ニ相募、聊之爭

論重キ御取扱メ」相成儀、重々不届至極ニ有之由、依之

急度可被仰付由得共、多年「相勤ルニ付、以 御憐愍、御

行料被召上、寄合格江役下被仰付之、」

一於同所

郡奉行 角田 弥六

其方儀、去當年大罽組乳井葉師堂兩村山論之儀、那奉行

引請之扱向ニ付、其方右役之儀別而始未取メ可致由処、必

竟「近來同役不和合ニ而諸事熟談無之、區々之取扱故、支

配之者共」一致不致、尚又御用向齟齬之儀而已有之、旁等

閑之処々、奸曲」之者共色々手段取巧、浮言を申觸、人氣

を騒、無智之百姓」共疑惑不法之願相募、聊之爭論重キ御

取扱ニ相成儀、輕」キ身分を段々結構御取立被仰付由

御厚恩令忘却、重々不」届至極ニ有之由、依之急度可被仰

付由得共、多年相勤ルニ付、以」御憐愍御役料勤料共被召

上、御手廻格ニ役下被仰付之、」

56 文化六年六月六日

一御城附三番組警固太田市之丞・高木源十郎儀、常々同役不和

合、其上我意相募、殊ニ並足輕共之内病死跡并御暇願等申出

由「節、賄賂等申受、取扱向依怙最負之儀有之、組一統難儀

之趣相」聞得、不届至極之者共ニ付、急度可被仰付由得共、

格段以 御憐愍、」並合之御給分被下置、掃除小人江役下申

付由、此旨御申渡勘定奉」行可被差越旨、御城附物頭成田定

次郎江申遣之、」

57 〔二八〇〕 文化七年正月十七日

一於須藤五郎大夫宅申渡之覺 諸手物頭 海老老<sup>〔名〕</sup>彦左衛門

其方儀、昨年松前奥地ソウヤ為御国被遣由処、勤方不行届

之筋」達 御聴、無調法至極ニ被思召由、依之御役知被召

上、寄合格江御役」下被仰付之、

出座 大目付

58 〔二八一〕 文化八年十一月三日

一於山屋長太夫宅申渡之覺 郡奉行 野呂助左衛門

其方儀、大鱧・尾崎・大光寺三ヶ組之内十六ヶ村之者共、柴草刈取」場所無之、難儀ニ付、三ツ目内領明山願申出の節、芦ノ沢明キ山ニ申付」の儀、三役方見分伺之上明キ山可申付の処、相談紙面返事濟口ト心」得、軽忽ニ開山申付、村方之者共狼藉ニ及ヒ、御取扱ニ相成の儀、舍」違之扱とハ乍申、常々同役不和合、熟談無之処々、事起り、既先年」乳井薬師堂山論之儀ニ付退役被仰付、間もなく再役も被仰付」ルニ付、万端心ヲ入可相勤処、御政道筋蔑如ニ心得、重々不届至極」ニ付、急度可被仰付の得共、以御憐愍、知行之内三十石并御役」料共被召上、御留守居組江役下被仰付之、」

同日

郡所小頭格物書御代官加勢今文司儀、大鱧・尾崎・大光寺三ヶ組」之内十六ヶ村之者共、柴草刈取場所無之、難儀ニ付、明山願」之節、穿鑿方不行届、其上芦ノ沢明山之儀、郡奉行々」差圖之節、山方々ハ伺濟無之ニ付、山役人制道致の処、村方之」者共及狼藉ニ、宿川原役所江罷越騒立の節、制道之上取鎮」可申出、却而逃隠の旨相聞得、未練至極之致方ニ付、急度可」被仰付の得共、格段以御憐愍、勅料被召上、長柄之者江役下申」付の、此旨申渡長柄奉行

江可被差越旨、郡奉行竹内長左衛門江」申遣之、

59 文化八年十二月十六日

一以手紙致啓上の、米沢百弥親忠吾儀、八幡御藏立合動中、御藏」奉行水木伴助拔米之儀申合、猶又老人勤之処、小泊村見物ニ罷越、」数日逗留致、御役儀亡却、不届至極ニ付、急度可被仰付の得共、数」代相勤の跡之儀ニ付、格段之以御憐愍、右百弥儀知行被召上、新」十人扶持被下置、御目見以下御留守居支配被仰付の、此旨可被仰渡」旨、楠美在司方齋藤小左衛門江申遣之、」 (一七オ)

60

御役有之節取扱向、左之通、  
文化十年九月廿三日

御用之儀有之の間、今晚七ツ時私宅江可被相詰の以上、

和嶋丈右衛門殿

森岡 金吾

今晚七ツ時於私宅申渡之御用有之の間、各内老人前々之通  
出座可有之の以上、

大目付中

森岡 金吾

今晚七ツ時於私宅繰出御用有之の間、各内老人可被相詰の以上、

御目付中

森岡 金吾

於森岡金吾宅申渡之覺

和嶋丈右衛門

其方儀、江戸詰合中不言行之旨相聞得、不届ニ付、御役料被召上、御使番格江役下被仰付之、

右申渡相濟、則刻御家老衆江左之通、

以手紙啓上仕、今晚於私宅申渡之御用、唯今相濟申、此

段申上以上、

〔偏家老〕  
渡 將監様

森岡 金吾 〔二七〕

〔五〕 御暇之部

61 元禄八年十月  
〔二六九五〕

一當年不作ニ付、七百八十四人御暇被下置、江戸勝手四人五人御暇被下置、

62 元禄十五年  
〔二七〇〕

一百人小人三十五人、掃除小人五十三人、馬屋小人四十四人御暇被下置、

63 正徳五年  
〔二七一五〕

一此度御減少ニ付二百九十人御暇被下置、

64 宝曆六年九月六日  
〔二七五六〕

一御徒山田金五郎申立、佐々木善太左衛門悻私甥傳太郎と申者、幼少私手ニ附、去春私居宅拝領引移ニ付、直ニ私方江取寄置、鈔術指南并勝手方世話申付置、内々續方不都合仕、至極及難渋、而、私江申訳難相立罷有由ニ御座、私去年召仕、家來弥助と申者首尾好相勤、而暇遣、當年柄之儀及難儀、由ニ而、不便ニ存、去月私方江取寄置申、此者往々取續、方も不相見得、傳太郎并妻儀勝手方及難儀、幸ニ仕、私去月廿七日之晚、御城泊番之節、取逃可仕、而、右兩人を色々取捨立退セ、其序を以私方品々取逃仕、相尋罷有内、兩人儀ハ木作新田石館村与右衛門と申者、傳太郎、間柄之者故、同人方江罷越、右勝手方不都合之申訳等、仕、去月廿九日、右与右衛門方、此方ニ罷有、知、申來、間、去ル二日之夜、妻儀呼寄、同四日、右傳太郎取寄置、善太、左衛門列座ニ而、逐一僉議仕、毛頭密夫之筋ハ無御座、右差支私江申訳難相立罷有、右弥助ニすめられ立退、申

由ニ御座也、尤弥助儀ハ行方相知れ不申也、右申上由通全  
密」夫之筋ニ無御座也、然処理不尽ニ兩人打取也儀実議ニ無」  
御座也ニ付、右傳太郎儀ハ同人親善太左衛門方江相返申也、  
妻儀ハ「昨五日離縁仕也、段々右之仕合故、世人上之人口難  
逃於私難」儀至極ニ奉存也間、別紙書付を以無據永ノ御暇之  
儀申上也、」

右同人申立也御暇願、左之通、

乍恐以書付申上也、私儀宝曆四年閏二月七日御奉公被召出、  
其「上家」屋敷等拝領被仰付、段々結構被成下、御厚恩之程  
冥加至極」難有仕合奉存也、然処為差御奉公も不申上、残念  
至極ニ奉存也、「然ハ別紙口上書を以申上由通、此度私妻不  
埒之儀ニ付、前後之」始末必竟不肖之私儀故、緩セ等之仕方  
ニも可思召也哉、尚又」世上之人口難點止、何共心外之至ニ  
也、不及是非仕合奉存也、依之」一應之得悪名、永夕御奉公  
申上由段、却而恐入奉存也ニ付、恐至極」之申上由ニ奉存也  
得共、私儀永之御暇被下置也様奉願也、寸志之」御奉公をも  
仕兼也段、残念至極可申上由様無御座也得共、一分之不」辛、  
不得止事儀、此段奉申上由、右之趣不苦儀ニ御座也ハ、何  
分ニも」宜御沙汰奉仰也以上、

山田金五郎

.....○

宝曆六年九月六日

工藤和次郎様

右之通申出之、申立之筋本末無作法無之ニ付、御奉公是迄之  
通相勤也」様被仰付之、

宝曆六年十月八日妻一件儀絶之部ニ有之、

宝曆六年十月八日

一 佐々木善太左衛門申立也、私悻傳太郎儀山田金五郎門弟ニ御  
座也上、同人ト」間柄ニ御座也、兼而申也ハ、門弟も大勢ニ  
而」取扱等も差支申也旨依」頼、去春方同人方江差遣置也  
処、去月廿七日金五郎當番ニ御座也処、「同人妻并家來弥  
助、私悻傳太郎三人出奔仕也段、翌廿八日私方江」相断申也  
間、早速人差出相尋也内、私親類木作新田石館村高橋」新五  
左衛門方ニ罷有也段相知也由間、金五郎方も人差遣妻引取申  
也、「傳太郎儀是又昨四日呼上ケ、直ニ金五郎方江差遣申  
也、同人方ニ而」妻并悻傳太郎共僉議仕也処、外之儀ニハ無  
御座也、至而内々差支、「諸道具等も賣拂、訳相立不申事共  
ニ而、金五郎妻并悻傳太郎」家來弥助共三人申合出奔仕也答  
ニ相究、路用支度錢等家來」弥助ニ持也由也、半途方欠落仕  
也ニ付、無據兩人石館村新五左衛門方江」罷越也由ニ御座

以、右詮議之筋委クハ金五郎方々も可申上と存以、〔二九〇〕  
 右之通同人方ニ而僉議相濟以旨、私方江忤傳太郎相返シ申以、  
 傳太郎儀至極不屈ニ御座以ニ付、弘前方十里追放仕度奉存  
 以、此一段奉伺旨申出之、

同九日右追放ニ付、善太左衛門方遠慮伺申出之、不及遠慮  
 旨被仰付之、

65 〔二七六〇〕  
 宝曆十年十月十六日

一 町醫松井順益家業不愼ニ付、御目見被召上之、

66 〔二七六一、二、三〕  
 宝曆十二年八月廿二日

一 諸手足輕千嶋長右衛門、先月廿九日於王余魚沢、刀を抜、村  
 中騒セ、往一來之者之障ニ相成、不屈ニ付、永之御暇被下置  
 之、

67 〔二七六五〕  
 明和二年七月廿三日

一 御目見以上御留守居支配古川七郎儀、幼少ニ而病死、其上末  
 期願書付文言不埒之儀有之、永之御暇被下置之、

68 〔二七六六〕  
 明和三年正月廿六日

一 町同心小野寺伴之丞儀、去ル十八日之夜致酒狂、下鍛冶町金  
 丸屋一五郎次宅江罷越、同人手代并下人江手疵を負セ、段々  
 之致方一不屈ニ付、永御暇被下置之、

69 〔二七六七〕  
 明和四年正月十一日

一 御目見以下御留守居支配川元左内儀、頭申立之通永之  
 御暇被下置以間、申付以様、御留守居組頭江以手紙申遣之、  
 〔一九ウ〕

70 〔二七六〇〕  
 安永九年十月十六日

一 此度格段之御省略ニ付、御目見以下之者之内御暇被遣之、

71 同日

一 御醫者井上文庵・藤田元伯・粕谷全哲、醫術未熟ニ付、永之  
 御暇被下置以、

72 同廿日

一 足輕目付菅和藏儀永之御暇被下置以、此旨申渡以様大目付江  
 申遣之、

73 〔二七八二〕  
 天明二年五月十三日



一大組与力片山市郎左衛門儀、野宮次五右衛門養子之儀ニ付御詮儀之筋、答書之内右大御役之御方殿付ニ相認、其上右養子取組之儀「過分之錢等養父江相返リ讓請同意之儀、不届至極ニ付、御給分」被召上、永之御暇被下置之、

74 天明四年八月六日

一諸手足輕對馬弥七郎、去月御家中御手當錢渡之節、本山久藏方江御金奉行方之下渡似セ手形致謀叛、受取ニ差向、不届至極之者ニ付、御給分被召放、永之御暇被下置之、

75 寛政元年十二月九日

一諸手八番組足輕須藤治部之助儀、當八月江戸表江七日振御飛脚「よて罷登ル処、道中於矢須駄松前家中方金子借用、是迄返弁も不致ルニ付、同所留守居方書役方江戸警固共江返弁方之儀申來ル由、猶又右金子他家中方借用之節名前等偽

申懸、旁以不届者ニ付、永之御暇被下置之、此旨御申渡可有之」旨諸手者頭江山中専藏江申遣之、

但右申渡評定所之申渡ニ可申付ル得共、頭方依申出頭宅ニ而「申渡ル様申付ル、

76 寛政五年八月十二日

一大組足輕齋藤富右衛門儀、病身ニ付永之御暇願、右跡江十二歳之「子召抱之儀申出ル得共、幼少之者跡目申立之儀難申付旨、大組」足輕頭江申遣之、

77 寛政十年十月十六日

一傍嶋源八郎儀、吉村善藏性新七病身ニ而嫡子難相立、双方申立ニ寄「引取否、間も無之快氣之由ニ而嫡子願申出、其上始新七引取方」之儀ニ付内々不人情之儀有之ルニ付、御役御取放知行被召上之、「尤先祖を被思召、格段之以 御憐愍、四男富弥へ新ニ式百石被下」置、御留守居組被仰付之、右ニ付親類遠慮伺之儀、永之御暇之部ニ而取扱ル様申付之、

78 寛政十一年正月廿九日

一御留守居組久保田貞吉儀、幼年ニ而病死ニ付、御定法之通跡式「被召上之、右ニ付、頭并親類遠慮伺不及差出旨申遣之、

79 文化六年五月廿日

〔一〇七〕

一於竹内衛宅申渡之覺

谷口 理介

其方親兵九郎儀、當二月居宅出火之節、居宅一圓ニ火迫り  
 此迄一不存、殊ニ病身之老母有之処、漸ク立退セ由、然  
 処弥増大病ニ罷成、間も無之病死之旨申出由、然ハ老母  
 介抱日頃不行届之致方、言語同断不届至極ニ付、身上被  
 召上之、乍然旧家ヲ被「思召、格段之以 御憐愍、新ニ五  
 人扶持被下置、 御目見以下御」留守居支配ニ被仰付之、  
 猶又兵九郎儀其方江御預之上他出」差留被仰付之、

出座 大目付

但兵九郎御手廻番頭、理助ハ御手廻、  
 実ハ老母焼死致セ由、

80 同廿三日

一於評定所御目付申渡之覺

以上支配 今 浅右衛門

其方儀常々不言行、其上家内不似合老母江對シ不孝之旨  
 相「聞得、殊ニ先年方衣服定も被仰付由、家内迄役柄不  
 相應之」着美服、言語同断重々不届至極之者ニ付、急度可  
 被仰付由「得共、格段之以 御憐愍、御給分被召上、永之  
 御暇被下置之、」

申渡御目付、 出座四奉行・御目付・両目付・町同心、

但廿三日可被申渡所、在勤ニ付卅日ニ相濟、

81 〔八一〕  
 文化八年六月四日

一三八

一屋敷奉行申出由、昨三日於瓦ヶ町成田和右衛門無調法之儀御  
 座ニ付、永之御暇被下置、同人家屋敷御取上被仰付由ニ付、  
 親類斎藤比吉并「和右衛門出會ニ而、御徒目付斎藤金司立合  
 之上、建具等相改由所、建」具并敷板等一切無御座由ニ付、  
 右之通荒シ建家而已受取方難」相成旨挨拶仕由、和右衛門  
 申由ハ、難儀ニ而戸障子敷板并畳等迄」段々賣拂申由ニ付、  
 此儀ニ而住居罷有由間、何分右之通ニ而受取」由挨拶ニ御  
 座由間、兎哉角仕由而ハ遅刻相成由ニ付、不得止事」立合目  
 付立合之上、夫々相改受取由旨申出、承届旨申遣之、

82 永之御暇之上御追放取扱

文化八年十二月十六日

一以手紙致啓上由、御用之儀有之由間、水木件助儀今晚七ツ時  
 評定所江」相話由様可被仰付由以上、

溝口傳左衛門様

御用番御用人方

一今晚七時於評定所、大目付申渡之御用有之由間、前々之通各  
 出座」可有之由以上、

四奉行中

右 同断

尚々右申渡相濟追放之者有之由間、町同心之儀并其外共差支

無之」様ニ可被申付以上、

一今晚於評定所各申渡之上追放之者有之由間、出座御徒目付足輕」并附添足輕目付共御目付承合相動由様、御申付可有之由以上、

大目付中

右 同断方

一今晚七ツ時於評定所、大目付申渡之御用有之由間、前々之通各内」老人出座可有之由以上、

御目付中

右 同断

一申談由御用有之由間、各内老人只今私宅江御越可有之由以上、

大目付中

右 同断方

但申渡書相渡、

一於評定所大目付申渡之覚

水木 伴助

其方儀八幡御藏動中、立合米沢忠吾申合、同役葛西忠太

小泊村へ見物ニ罷越由跡ニ而、御藏封印切戸前明ケ由様申

付、拵」頭不承知之旨申出由由、強而戸前開セ抜米致シ、尚

又御藏米」滅石相立、村々方手傳米為差出、其上御米手形

貸付等致シ、」重々不届ニ付、永之御暇被下置、大場御搦十

里四方追放被仰付由、

申渡 大目付

十二月十六日

出座 四奉行

御目付

兩目付

町同心

一以手紙啓上仕由、今晚於評定所大目付申渡之御用ハ、唯今相濟由旨」申出由、此段申上由以上、

御用番御家老宛所片苗様

御用番御用人方 (二三才)

〔六〕 家督之節身上被召上候者并半知

被下置由者等之部

83

一閉門之并逼塞之内病死之節ハ跡式可被召上由哉、

一慎并遠慮中病死之節ハ半知可被下置由哉、

但組支配并親類之儀ニ付遠慮中病死之節ハ、跡式其但

可被下置由哉、

一親病死致、其子跡式不被下置由内病死之者ハ、跡式可被召上由哉、

但親子之内遠国御用登等之節、子ノ病死を不存由而跡目願」差上由而後、病死之旨申来由節ハ、右之訳并跡目之者

申出<sub>レ</sub>節ハ」無相違被下置<sub>レ</sub>儀、親病死後、子死去之節ハ、跡式不被仰付<sub>レ</sub>内之」病死と同様可被仰付哉、

一家督被下置<sub>レ</sub>十七歳以下之族病死之節ハ、半知可被下置<sub>レ</sub>哉、一末期之養子ニ相成家督被下置<sub>レ</sub>上、其者病死之節養子も無之」者跡式可被下置<sub>レ</sub>哉、

右ハ御定書并古來方當時迄被仰付之趣斟酌仕<sub>レ</sub>而申上<sub>レ</sub>以上、

84 寛文十年三月廿九日

一川原田茂大夫儀、跡式悴十四歳迄 御目見茂不仕<sub>レ</sub>儀由断<sub>レ</sub>内間、「跡式被仰付間敷と被思召<sub>レ</sub>得共、先祖御奉公之儀も

有之由申傳」<sub>レ</sub>付、其段被思召、元之三人扶持ハ悴ニ被下<sub>レ</sub>、加増之甘懐ハ被召上<sub>レ</sub>、

85 寛文十二年閏六月廿四日

一三橋弥次右衛門悴九歳ニ罷成<sub>レ</sub>未 御目見不申上<sub>レ</sub>得共、似合跡式被仰付」被下度由、須藤惣右衛門・伴七郎右衛門願状差上<sub>レ</sub>、披露申<sub>レ</sub>処、悴幼少其」上 御目見茂不申上、先祖別而御奉公抽<sub>レ</sub>儀も無之ニ付、跡式不被」仰付<sub>レ</sub>、右之段惣右衛門ニ申渡之、

86 寛文十三年八月廿六日

一新岡久兵衛儀跡式之儀、親久々御奉公も仕<sub>レ</sub>者ニ而御不便ニ思召」<sub>レ</sub>得共、悴十一歳ニ罷成<sub>レ</sub>迄 御目見不仕<sub>レ</sub>ニ付、跡式不被仰付<sub>レ</sub>、」併當作有地之内半分被下<sub>レ</sub>由、七戸四郎右衛門・西村次郎左衛門ニ申渡之、」

87 天和三年六月三日

一阿保五左衛門儀被犯病氣、悴切殺申ニ付、知行被召上<sub>レ</sub>段、勘定」奉行江申渡之、

88 貞享元年七月十九日

一川口助八儀病死ニ付、軽キ者之儀其上幼少ニ<sub>レ</sub>得共、旁以跡式」可被下置<sub>レ</sub>無之<sub>レ</sub>得共、親助八日頃能相勤<sub>レ</sub>由ニ付、悴万太郎ニ助八知行之内三步一可被下置<sub>レ</sub>、成長之後御奉公相勤<sub>レ</sub>節本知可」下<sub>レ</sub>旨、則彦左衛門ニ申渡之、右万太郎諸手足輕頭支配ニ可仕之趣、」神又兵衛ニ申渡之、

89 貞享元年八月十日

一横内長四郎儀三人扶持<sub>レ</sub>者ニ<sub>レ</sub>、去月廿八日病死ニ付、其段相同<sub>レ</sub>処、悴」茂無之ニ付御扶持被召上<sub>レ</sub>旨被仰出<sub>レ</sub>ニ付、

唐牛甚右衛門宅ニ而從弟」木村清次郎江申渡之、

90 同年十月廿七日

一工藤左衛門儀、賀養子工藤七十郎儀番頭小山笹右衛門同道ニ而申渡ハ、」養子之儀其上 御目見も不申上ハ者之儀ニ得ハ、跡式可被仰付様無」之ハ得共、願申上ハ様筋目成儀ニ被思召ルニ付、跡式高百石之内」御藏米百俵被下置ハ旨、黒土刑部左衛門出座申渡之、」

91 同日

一船水傳三郎儀、賀養子九郎右衛門儀番頭町田兵助同道ニ而召寄」申渡ル者、養子之儀其上 御目見も不申上ハ者之儀旁以跡式」可被仰付儀ニ無之ハ得共、存生之内奉存<sup>〔マ、レ〕</sup>ル養子之儀ニ付、跡式高百」石之内御藏米百俵被下置之趣、刑部左衛門并清太左衛門出座申」渡之、

92 同日

一乳井彦左衛門儀樋口衛門同道ニ而召寄申渡ル者、乳井羽右衛門<sup>〔三ツ〕</sup>儀」末期之願書付ニ 御目見茂不申上ハ二男之儀申上ハ、存生之内」右之段不申上、末期ニ至リ願申上ハ儀仕形不宜被

思召ルニ付、二男」江者跡式御立可被遊<sup>〔マ、レ〕</sup>ル因蔭同氏彦左衛門江只今迄被下<sup>〔マ、レ〕</sup>御扶持」切米之外、右之羽右衛門江被下置<sup>〔マ、レ〕</sup>御扶持切米被下置旨申渡之、刑部」左衛門并清太左衛門出座、」

93 貞享元年十月廿七日

一石郷岡兵左衛門儀、番頭奈良三郎兵衛召寄申渡ル者、兵左衛門儀長病」ハハ<sup>〔マ、レ〕</sup>病中願も不申上、末期ニ至リ養子願申上ハニ付、跡式不被下置<sup>〔マ、レ〕</sup>、

但妻子江當物成之内被下置<sup>〔マ、レ〕</sup>儀ハ御定法之通被下置旨申渡之、刑部左衛門并清太左衛門出座、

94 同日

土門四郎左衛門儀、悴万太郎儀松浦治左衛門同道ニ而召寄申渡<sup>〔マ、レ〕</sup>ハ、万太」郎儀 御目見も不申上ハニ付跡式御立可被成様無之ハ得共、四郎左衛門儀」御近習之御奉公数年無怠憎相勤ル者之儀ニ付、五人扶持」被下置<sup>〔マ、レ〕</sup>旨申渡之、刑部左衛門并清太左衛門出座申渡之、

95 同日

砂川喜右衛門儀、親類高橋作兵衛召寄申渡<sub>レ</sub>者、喜右衛門跡式可被下置様」無之ニ付、御扶持切米被召上旨申渡之、

96 同日

一池田安右衛門儀、舅館山十右衛門私宅江寄、召申渡<sub>レ</sub>者、安右衛門跡式可被下置」様無之ニ付而、被召上<sub>レ</sub>旨申渡之、  
〔二四才〕

97 貞享二年二月二日

一角田左次左衛門儀致病死、子も無之、跡式可被下置様無之ニ付知行被没」収之趣、左五兵衛ニ申渡之、依之右家屋敷改受取可申旨、屋敷」奉行布川儀助・今次右衛門江申渡之、尤立合之御目付遣可申趣、佐藤」新五左衛門江申渡之、

98 同年五月五日

一伴五三郎儀去々年致病死<sub>レ</sub>処、子共も無之ニ付、御知行被召上之旨、成」田傳兵衛并伴弥五左衛門ニ申渡之、

99 同年六月廿三日

一佐藤五郎右衛門儀當春病死仕<sub>レ</sub>処、子共も無之、養子ニ願<sub>レ</sub>弟段、親孫左衛門書付」差出<sub>レ</sub>、子共も無之<sub>レ</sub>得、ハ跡式可被下

置様無之由、江戸方申來<sub>レ</sub>ニ付、其段」福士軍兵衛ニ申渡之、

100 貞享五年十月十五日

一礪谷新八儀跡式之儀被仰出<sub>レ</sub>ハ、御国江引越間も無之死去、不便ニ被思」召<sub>レ</sub>、妻子迷惑可仕と被思召<sub>レ</sub>、伴幼少之儀ニ<sub>レ</sub>得共跡式無相違被下置<sub>レ</sub>、」伴随分守立成人ニ仕<sub>レ</sub>様可相心得旨、御意之趣就申來、山田源右衛門・」松岡新兵衛、右兩人、求馬宅江召寄、右之趣申渡之、

101 元禄二年二月五日

一奈良兵左衛門儀伴幼少ニ付、弟傳兵衛ニ相續被仰付<sub>レ</sub>旨、先達而」江戸方申來<sub>レ</sub>得共、其内弟傳兵衛も病死ニ付、其段江戸江申上」<sub>レ</sub>処、弟傳兵衛も病死ニ付兵左衛門跡御立可被成、」無之<sub>レ</sub>」得共、御代々馬醫役をも相勤<sub>レ</sub>者之筋目を思召、伴江」三人扶持被下置<sub>レ</sub>間、御留守居組之支配ニ入差置可申<sub>レ</sub>、」其身成立<sub>レ</sub>ハ、相應之儀可被 仰付<sub>レ</sub>、其段一類有之<sub>レ</sub>ハ、一」類之者呼<sub>レ</sub>而可申渡由申來、則青沼勘左衛門ニ右之旨」申渡之、

102 元禄二年五月十日

一 笹村四五右衛門儀病死ニ付、委細先達而江戸江申上ル由、六歳之悴跡式可被<sub>レ</sub>下置様無之由得共、四五右衛門存生之内御用之儀別而情を出相勤ルニ付、「悴江銀六百目ニ三人扶持被下置、右之通被仰付ル旨申來、則右之趣」小田桐戸右衛門ニ申渡之、

103 同年九月廿九日

一 小山内運動儀七月晦日病死ニ付、江戸申上ル由、老母有之由當<sub>レ</sub>年之知行米ハ御定之通相渡可申ル由、跡式可被下置様無之ニ付<sub>レ</sub>不被下置ル由申來ルニ付、則久保田数馬并勘定奉行江申渡之、

104 〔六九〇〕  
元禄三年正月八日

一 成田理右衛門儀病死ニ付、跡式之儀江戸江申上ル由、可被下置様無之ニ付御扶持切米被召上ル由、去年御扶持切米ハ御定之通被下之旨、高屋権兵衛ニ申渡之、  
〔一五〇〕

105 元禄三年十二月廿六日

一 葛西甚助儀當九月病死、悴巳之助今年十五歳ニ罷成ル由申立

ニ付、「將監殿江申達ル由、子共幼少ニ有之由ニ付、跡式可被下置様無之由」被<sub>レ</sub>仰、則夫ニ申渡之、

106 同年同日

一 小田桐忠右衛門儀當五月病死、悴専太郎今年十四歳ニ罷成ル由申立ルニ付、「將監殿江申達ル由、子共幼少ニ有之由ニ付跡式可被下置様無之由被仰、」則夫ニ申渡之、

107 同日

一 木崎次五右衛門儀當月六日病死、悴卯之助今年四歳ニ罷成ル由申立ルニ付、將監殿江申達ル由、子共幼少ニ有之由ニ付跡式可被下置様無之由」被<sub>レ</sub>仰、則夫ニ申渡之、

108 〔六九一〕  
元禄四年十月廿八日

一 須藤角左衛門儀跡式願之儀、角左衛門実貞ニ御奉公仕ル者ニ付、上<sub>レ</sub>も「御不便ニ被思召ル由得共、跡式御定可被成<sub>タテ</sub>成<sub>レ</sub>無之由間、知行被召上ル由、當<sub>レ</sub>年之物成者不残被下置ル旨申來、則右之旨光侯長兵衛ニ申渡之、

109 〔六九二〕  
元禄五年正月廿日

料 一森内本右衛門儀十一月朔日方傷寒相煩、存命不定ニ罷成也、  
 粹孫太郎「今年二歳ニ罷成申也、私死後及湯命不申様奉願也  
 旨、末期」書付差出也ニ付、江戸江差登セ申也処、此度申來  
 也ハ去年物成不<sup>〔二五之〕</sup>「残悴ニ被下也、知行ハ被没収之趣被仰越ニ  
 資 付、其段杉山勘左衛門江」申渡之、

110 元禄五年六月四日

一兼平喜左衛門儀病死、悴無之ニ付、御切米御扶持被召上也、  
 則山中次郎九郎江」申渡之、

一同日小倉半之丞儀若年、悴無之ニ付、俵子被召上之、則唐牛  
 八郎左衛門江」申渡之、

111 <sup>〔二七三〕</sup> 享保十六年七月廿七日

一成田甚次郎儀當七月三日岩木川ニ而水ニおほれ相果申也、依  
 之右」明跡江同人弟勤太郎御切米貳拾俵式人扶持ニ而新規召  
 抱之儀」奉伺旨申出ニ付、大学江達之、申立之通申付之、

112 <sup>〔二七三〕</sup> 享保十八年四月朔日

一樋口丈左衛門儀、親善右衛門御擬作之内金六兩四人扶持被下

置之、御中」小性被仰付之、

但丈左衛門親善右衛門儀、享保十六年二月廿四日変死仕也、

113 同年五月廿八日

一今茂次右衛門儀油川湊目付手附相勤罷有也処、病死氣ニ而當  
 月」六日罷上也節、津軽坂ニ而熱ニ被犯、途中ニ而自害仕也、  
 右明跡江同人弟」佐左衛門新規被召抱度旨、僉議之上申立之  
 通新規召抱ニ由付也旨、吉左衛門方申遣之、 <sup>〔二六才〕</sup>

114 享保十八年五月廿八日

一八木橋五八郎儀足輕代目付被仰付、川合拾歩一流木改立合相  
 勤也」而罷有也処、病氣故引登、氣を取違、腹切相果申也故、  
 右明跡江」同人弟八木橋九之助新規ニ被召抱度之旨申立ニ  
 付、新規抱ニ申付」也旨、吉左衛門方申遣之、

115 <sup>〔二七四六〕</sup> 延享三年六月十八日

一中村林砂親林齋儀於江戸表致変死也ニ付、御給分被召上、以  
 御憐愍、悴林砂儀御茶道附並之御擬作被下置之、御茶道附ニ  
 被仰付之、

但林砂親林齋儀、延享三年四月廿四日変死仕也、



116 〔七六七〕  
明和四年五月廿八日

一御馬廻七戸権右衛門儀致変死レニ付、御定法之通跡式被召上レ、併レ「数代相動レ跡之儀故、以 御憐愍、悻幸次郎江新規百石被」下置、御留守居組ニ被仰付レ、尤幼少之内七人扶持被下置、御人「少之組江御割入可有之旨、竹内源大夫江申遣之、」

安永八年三月朔日右幸次郎跡式高之内五十石、末期申立レ養子兵藏江被下置、御留守居老番組被仰付之、

安永九年正月廿八日右兵藏儀去春家督被下置、間も無之

病死ニレ得共、以 御憐愍、跡式無相違末期之養子六弥江被下置、「御留守居老番組被 仰付之、 〔二六ウ〕

〔七〕 追 放 之 部

117 〔二六九九〕  
元禄十二年十二月八日

一追放と有之分ハ、侍百姓上下ニ不限、家内闕所、妻子家人追拂、其処ニ不差置レ儀、御太法之格式ニレ間、此度ニ不限、其段可申付旨被仰出レ、右之段先日卅日江戸方申來之、

118 〔二七〇二〕  
元禄十五年七月十一日

一御小性組山本八郎右衛門、於江戸御條目を致相違、其上傍輩江對し」不相應之申懸を任、不届ニ付、南部口追放被仰付之、

但南部口ニ而大小ヲ渡、其節附添之侍并歩行目付立合、御国江」立帰レハ、見當次第打捨御作法ニレ間、其段可相心得旨申渡、「其時之被仰出ニ而、寺社奉行老人出座重而之御格ニハ不成」事、

119 〔二七〇〇〕  
宝永三年六月廿三日

惣而追放と申時〔ハ〕、弘前追放ニ而も有之ハ、不残欠所と可心得事、「右之趣今日瀧川平右衛門被申付之、

120 〔二七一〇〕  
宝永七年八月十三日

一吉岡七兵衛儀、此間煩申レ由相断レ処、作事等を致シ向走廻り」〔二七〇〕ハ段相聞得、不届ニ付、弘前方五里四方追放、御定之場所御構」被成レ、御通之御道筋、両濱、黒石、其外大郷ニ罷有間敷レ、

121 〔二七一四〕  
正徳四年十二月十一日

一越山之者、跡ハ闕所、追放之者、家ハ上リ、諸道具ハ妻子ニ被遣レ、尤追放之者も、其品ニ寄、其者ニ寄、闕所ニ申付レ者も

可有之事、

122 享保七年四月朔日

## 科人追放之事

一右科之品ニ依而扶持を召放シレ敷、家財闕所又ハ其品輕クハ過レ料等、夫々可被申付儀ハ勿論レ、件之悪事有之レ者領内ニ差置レを嫌ヒ、他所江放遣レ儀ハ有之間敷事ニレ、近年於公義ト追放もの先ハ無之様ニ被仰付レ間、於国々所々、其旨を存、猥ニ追レ放有之間敷レ、然ハ喧嘩トニ而双方疵付レものハ、又ハ待レ待と品ニ寄、追放被申付、却而可然趣も可有之レ間、其段ハ格段之事ト、右之通可被相心得レ以上、

123 享保十八年八月十二日

一蝦名傳九郎儀、親勇斗江不孝ニ付、勇斗申立之通、知行屋

敷被召放、五里四放追放被仰付、御国元大場ニ罷有間敷レ、

一親勇斗江被仰渡、左之通、

其方悴傳九郎儀、其方依申立、追放被仰付レ、家財之儀ハ其方江被下置レ、尤傳九郎追放被仰付レ得共、其方存寄茂レ者

如何様共、其方心次第可致レ、

(二七〇)

124 寛延三年五月廿八日

一郡奉行・勘定奉行申立レ、只今迄、在方百性高無共之内、無調法等有之、処拂・御追放等被仰付レ跡、闕所、田畑家屋敷家財諸色、入札を以御片付被仰付レ来レ、右闕所之内、家藏家財諸色之儀ハ格別、屋敷地田畑之儀ト闕所名目ニ入申間敷儀と奉存レ間、向後左之通可被仰付レ哉、

一御追放者者、前々方跡欠所被仰付レ間、家藏家財諸道具牛馬共ニ欠所被仰付、右入札代錢、欠所御藏江上納被仰付レ哉、一所拂之者ト、前々方家財妻子江被下置、家者御取建被

仰付レ間、右入札代錢、御内分御藏江納レ様可被仰付レ哉、只今迄死絶者走り跡等入札代錢、御内分江納來レ間、右之格を以申上レ、勿論御取納相滞レ分者、是又表方江致上納レ様可被仰付レ哉、

一科之輕重ニ不限、田畑抱地之儀ハ、御取上被仰付レ跡、百性入代リ望之者、御札錢入札を以申出、高札之者江御片付、右代レ錢表御金藏江納來レ間、右之格ニ申上レ、

右之通可被仰付レ哉、只今迄欠所被仰付レ間、百姓家屋敷田畑共ニ入加、入札申出、右代錢欠所御藏江相納申レも御座レ、田畑之儀ハ、御新檢田畑御高ニ御座レ間、欠所名目ニ者入申レ間敷儀と奉存レ、只今迄家屋敷田畑打込欠所入札差出

ハ儀、筋違と奉存ハ間、右之通申上ハ、向後前書之通可被仰付哉伺」申出之、伺之通申付旨申遣之、

125 延宝二年正月三日

一御小性組岩間新十郎常々不行跡ニ付追放被仰付之、  
右申渡相濟、上下着ハ保ニ而（ハ）えき（ハ）もの（ハ）えかせ（ハ）も御追放之場所迄召連其場所ニ而大小相渡追放可申ハ、右大小之儀ハ雜「職老人ニかたけさせ追放之場所迄召連ハ内惣様之跡ニ引」付為持可申事、

126 延享四年三月十九日

一山内弥五兵衛江申遣ハ者、御自分弟儀不行跡ニ付弘前五里四方追放致度去夏申立之通被仰付ハ処、先頃方弘前ニ致御致徒ハ段相聞得ハ、早々追放ハ様可被致旨申遣之、

127 宝曆三年二月六日

一盜致シル者、入牢之上、僉議相濟、追放之節、御領之者ハ左之方、他領者ハ右之方、手之甲江差渡一寸五歩輪之形ニ入墨致追放可申事、右之通向後被相心得、其旨可申付ハ以上、

128 宝曆四年七月四日

一町奉行申立ハ、盜致シル者、入牢之上、御僉議、御追放之節、手之中江入墨致ハ様、先達而被仰付ハ、併惣而盜致ル者ハ御仕置被仰付ハ、又ハ科之様子ニ寄、御追放被仰付ハ程之輕キ儀ニ御座ル者、入墨ニ及申間敷奉存ハ、依之向後入墨之儀無用ニ可被仰付哉、兩奉行江茂申合奉伺旨申出之、伺之通」申付之、

129 宝曆十一年正月廿一日

一四奉行申立ハ、於評定所、大目付・御目付申渡御用之節、阿房拂・腰拔拂被仰付ハ者江、其追拂ハ場所迄送届ハ上ニ而、大小差遣」ハ儀、前々之儀僉議仕申上ハ様被仰付ハ間、私共廉々御用番」等僉議仕ハ得共、睨と相知不申、大小差遣ハも御座ルハ、又遣不申」ハも御座ルハ而、兎角其時々御沙汰ニ而相濟ハ儀と相見得、區々」ハ御座ルハ、依之私共沙汰仕ハ趣、左ニ申上ハ、

一無調法不届之儀被仰付、御暇被下置ル者、是迄之通、  
一右被仰渡ニ而、何里追放被 仰付ル者、是迄之通追拂ハ場所迄送届ルハ、大小差遣ハ様、  
一腰拔拂・阿房拂被仰付ル者ハ、於評定所被仰渡、相濟次第、

料 直ニ右之者大小ハ闕所奉行受取レ様、

一御目見以下之者、追放并阿房拂、腰拔拂、何レ被仰渡レ而も〔七〕

是迄之通大小ハ闕所奉行受取レ様、

資

一阿房拂・腰拔拂之申渡、御書付ニ前々方何里と申渡被仰付無御座レニ付、其時ニ至リ、伺等ニ而差支申レ、依之阿房拂ト被仰渡レ節ハ、五里追放レ様、腰拔拂等被仰渡レ節ハ

十里追放レ様、右之通御定可被仰付哉、

右之通沙汰仕、此段奉伺旨申出之、阿房拂・腰拔拂里數〔九オ〕

之儀不申付レ節ハ弘前拂可致旨、其外沙汰之通申付旨申遣之、

130 〔七六六〕  
明和五年十月廿三日

一勘定奉人馬場郡兵衛家守左五兵衛、不屈之儀有之、御僉議之處、日頃不宜者ニ相聞得レニ付、弘前拂被仰付レ、

131 〔七七七〕  
明和九年七月廿六日

一堂野前村佐兵衛子弥右衛門・三右衛門、去十二月十二日之夜同村勘次郎ト申者変死之儀、貸方出入之儀ニ付及打擲打殺レ趣相聞得、一入牢之上、御僉議之處、差而打殺レ儀ニも無之レ得共、親左兵衛「居宅之内首縊罷在勘次郎を、私共取斗を以、向へ次郎吉と申」者之宅庇之内江首縊懸替置、見分受

ハ段、及白状、変死者」取扱方御作法も有之レ處、不屈之致方ニ付、五里追放被仰付レ、

右ニ付隣家半右衛門五里追放被仰付之、

一中村左兵衛雇催茂森町安右衛門、弘前追放被仰付之、

132 〔七七七〕  
安永二年四月廿日

一小泊村次五兵衛儀、無極印証ニ而家作ニ付、入牢之処、出牢之上、居」村方三里御追放被仰付レ處、老親大病ニ付居村徘徊

御免願申出之、四奉行沙汰申付レ處、此度大赦ニも御免之儀

申上置レ者ニ御座レ間、願之通被仰付レ様申出レ得共、附

添之内」御免申付旨申遣之、  
〔二九ウ〕

133 〔七七四〕  
安永三年七月廿三日

一御馬廻一戸源次郎、石渡御藏勤中、相渡レ御印手形を以質

座江入連、勘定之初又々賣家江無心引戻シ勘定相済、其上

前々々金錢之儀ニ付、拙き致方、武士道ニ相返シレニ付、身

上被」召上之、阿房拂被仰付之、

134 同 年八月十三日

〔御馬廻組頭〕  
一西館織部家來葉山助左衛門・葉山弥七郎、此度織部家屋敷

繰替被仰付<sup>レ</sup>処、建具等甚取荒、不届<sup>ニ</sup>付、弘前<sup>方</sup>三里追放被仰付<sup>之</sup>、

135 <sup>〔七七五〕</sup>  
安永四年三月三日

一長柄之者小山内久右衛門、亀甲町兵庫屋左兵衛方<sup>ニ</sup>而酒狂之上、「刀を抜、家内騒<sup>セ</sup>ル<sup>ニ</sup>付、弘前追放被仰付<sup>之</sup>、

136 同 年四月十一日

一諸物頭江左之通、

諸組足輕、先祖<sup>方</sup> 御印所持之者、無調法有之、永之御暇、又ハ追<sup>レ</sup>放等被仰付<sup>レ</sup>節、右所持之 御印、以來各<sup>ニ</sup>而取上、差上<sup>レ</sup>様被仰付<sup>レ</sup>間、左様御心得可有之旨申遣<sup>之</sup>、

137 同 年八月六日

一三上権藏養父新山村甚右衛門、御停止之薦僧宿等致<sup>レ</sup>段、不届<sup>ニ</sup>付、弘前并居村<sup>方</sup>三里四方追放被仰付<sup>之</sup>、 <sup>〔三〇〇オ〕</sup>

138 <sup>〔七七七〕</sup>  
安永六年四月六日

一元長町傳右衛門、先達而町内拂申付<sup>レ</sup>処、先頃<sup>方</sup>病氣、殊<sup>ニ</sup>老人之<sup>レ</sup>儀<sup>ニ</sup>付、誓字八郎方江快氣迄之内引取、養生致度儀、

五軒<sup>レ</sup>組合之者共願之通申付旨申遣<sup>之</sup>、

139 <sup>〔七八二〕</sup>  
天明二年二月十八日

一追放者、御目見以上以下共<sup>ニ</sup>不限、大小取押<sup>レ</sup>儀間違<sup>ニ</sup>間、以來追放之者大小取押<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>様申付<sup>之</sup>、

140 <sup>〔七八七〕</sup>  
天明七年七月九日

一御手廻組頭溝江傳左衛門申出<sup>レ</sup>、拙者与力八木橋善司粹傳吾儀、「於黒石表沢屋孫兵衛と申者之方<sup>ニ</sup>而、不届之儀有之<sup>ニ</sup>付、入牢<sup>レ</sup>被仰付<sup>レ</sup>間、傳吾親善司<sup>方</sup>御奉公遠慮伺申出<sup>レ</sup>間伺之通申<sup>レ</sup>付旨申出<sup>之</sup>違<sup>之</sup>、同十九日 御免之儀伺之通、

141 <sup>〔七八八〕</sup>  
天明八年七月十日

一吉村場左衛門家來喜八、去ル六日致酒狂、其上高聲<sup>ニ</sup>而屋敷内<sup>レ</sup>踏荒<sup>シ</sup>、法外之致方不届之者<sup>ニ</sup>付、弘前<sup>方</sup>三里四方追放被仰付<sup>之</sup>、

142 天明八年十月十三日

一於牢前御徒目付申渡之覚 工藤仁七郎

料

我儀、去七月七日黒石表沢屋孫兵衛方江罷越、金錢無心致シ  
三〇ウ  
いふ事起り、騒動ニ及ヒ、其場ノ間道罷通致出奔、未練之

至不届至極之者ニ付、出牢之上、大場御構、弘前ノ十里

資

一 於同所

八木橋傳吾

我儀、去七月七日黒石表沢屋孫兵衛方江罷越、金錢無心致シ  
いふ事起り、騒動ニ及セ、不届之者ニ付、出牢之上、大場御  
構、弘前ノ五里四方追放被仰付之、

同日

- 一 工藤仁左衛門儀、弟久弥仁七郎儀ニ付御奉公遠慮被仰付之、
- 一 御馬廻与力八木橋善次、悴傳吾儀ニ付御奉公遠慮被仰付之、
- 一 黒石表之者共も御僉議相濟い間、右之趣同所役人江町奉行  
より申遣い様ニ申付之、

143 寛政元年七月五日  
二七八ウ

一 鍛冶頭中村喜太郎僉議之筋有之、大組諸手并町同心之内ノ  
昼夜四人附添、他出差留い様申付之、

同年十二月十六日入牢被仰付之、

一同二年六月九日於取上御仕置場御徒目付申渡之覺

鍛冶頭 中村喜太郎

我儀、作事方吟味役并勘定人作事受拂役申合之上、

奸曲之致方有之、段々御僉議被仰付い処、及白状、大膽至  
三一才  
極「不届之者」ニ付、鞭刑二十鞭被行之、弘前ノ十里四方追  
放被「仰付之、

一同日於評定所御目付申渡之覺

作事吟味役 森 三之助

勘定人 古川三郎右衛門

右 同 役 岩間 喜内

作事請拂役 小野丈左衛門

右 同 柴田甚右衛門

右 同 相馬忠右衛門

右 同 菊池勝之丞

右 同 且代 吉藏

以下支配方右同加勢

其方共儀、鍛冶頭中村喜太郎申合之上、姦曲之致方有之、  
不届至極ニ付、御給分被召上、三里四方追放、跡欠所被  
仰付之、

144 寛政元年十二月十日

一 當御檢見之節、音物金子等相送い庄屋并百姓、前々御停止

之処不届ニ付、追放被仰付<sub>レ</sub>者共有之、

145 寛政二年二月十九日

一御馬下乘八戸藤八、忤善八不行跡増長ニ付、勘當之上、御追放被仰付度儀、伺之通、  
〔三七〇〕

146 寛政三年二月十一日

御留守居組廣田兵右衛門、忤清右衛門不行跡ニ付勘當致<sub>レ</sub>段申「付<sub>レ</sub>処、一向承引不仕、其上様々申懸等仕相募、私自分ニ相片付」可申手段無御座<sub>レ</sub>、依之弘前<sub>方</sub>二里四方追放被仰付被下置度「旨、願之通、町同心兩人申付旨申遣之、町奉行ニも二里四方追放」申付<sub>レ</sub>様ニ申遣之、  
〔三二七〕

147 同 年五月廿三日

一新町今泉庄三郎儀、鯨ヶ沢御藏米内借致<sub>レ</sub>旨相聞得、段々御僉議被仰付<sub>レ</sub>処、相違無之ニ付、死罪ニも可被仰付<sub>レ</sub>得共、此度非常之大赦被仰付<sub>レ</sub>ニ付、一等被宥罪、以 御慈悲一命御助、「引廻シ之上鞭刑三十鞭被行之、大場御搦之上、十里四方追一放被仰付之、

148 同日

一和徳町山本清兵衛・同久右衛門、我共儀、親四郎左衛門上納金、鉛を以「包金之躰ニ而致謀印上納相立、段々御僉議被仰付<sub>レ</sub>処、相違」無之旨及白状、上を相欺<sub>レ</sub>仕方、重罪之者共ニ付、死罪「<sub>レ</sub>」も可被仰付<sub>レ</sub>得共、此度非常之大赦被仰付<sub>レ</sub>ニ付、一等被宥罪、「以 御慈悲一命御助、引廻之上鞭刑三十鞭被行之、大場御」搦之上、十里四方追放被仰付之、  
〔三二七〕

149 同日

一和徳町小嶋忠左衛門儀、北御藏御取納手形謀印致<sub>レ</sub>旨相聞得、御僉議之処、相違無之ニ付、死罪ニも可被仰付<sub>レ</sub>得共、此度非常之大赦被仰付<sub>レ</sub>ニ付、一等宥罪以 御慈悲一命御助、引廻「之上十里四放追放被仰付之、  
〔三三〇〕

150 寛政二年二月十九日

一下乘八戸藤八忤善八儀、不行跡ニ付御追放之儀申出<sub>レ</sub>間、御馬役青沼半助<sub>方</sub>支配之者差添追放仕度旨申出之、伺之通申付之、

151 寛政五年七月十日

料 一蟹田町九郎助と申者、無調法之儀有之、御追放被仰付、右ニ付

同所町奉行遠慮伺申出之、右伺差出不及御返シ被仰付之、

町年寄方も遠慮伺申出之、是又御返被仰付之、尤町年寄

資 之儀ハ各所存之通取斗儀様、同所町奉行江申遣之、

152 〔一八〇八〕  
文化五年二月七日

一勘定奉行申出儀、御家中と族之内并御給人之内不調法之儀有

之」入牢被仰付儀、取押儀大小古物御藏江納置、追而入札

拂等ニ被仰付」儀得共、是迄被仰付儀趣、駈ト相分不申儀ニ

付、早速入札拂ニ仕儀」難相成、永々古物御藏ニ差置儀得

共、前々不<sub>レ</sub>之筋も御座儀趣相」聞得儀ニ付、以來之儀左ニ

申上儀、

一不調法之儀有之、入牢不被仰付、御追放被仰付儀分ハ、御追放

先」<sub>〔三三二〕</sub>にて大小相渡儀、并一間所江押込被仰付儀分ハ、御

免被仰付儀、大小御渡可被仰付答と奉存儀得共、入牢被

仰付儀分ハ雜人ニ落切」儀故、御免之上出牢被仰付儀而も、

大小御渡不被仰付儀ハ勿論、」再と浪人難相立部と奉存儀、

尚又入牢之後鞭刑追放等之仰」仰付儀分も、雜人之御片付」

付、是又前書同様之筋ニ奉存儀、」随而以來入牢被仰付大小

取上之分ハ、古物御藏江相納、早速入」札拂被仰付儀様、申

出之通被仰付之、

一右ニ付、大小入札拂可被仰付儀分、相坂金弥・工藤和次郎・

井上左源司・」一戸仁三郎・中村源兵衛、右之通申出之、

申出之通被仰付之、

153 〔一八〇九〕  
文化六年十二月廿四日

一於高杉組鼻和村端御徒目付申渡之覚

鼻和村金三郎二男  
源三郎

我儀、當九月同村嘉之妹まめ儀蒔苗村嘉右衛門子伊之方江

嫁」入之処、我先立之上村方之者同道ニ而嘉右衛門方江押

込、伊之」女房無体ニ引キ参儀旨相聞得、御僉議之処、右

まめと兼而不」義致、女房ニ致儀約束有之処、伊之方江嫁

入ニ付、親元懸合之上」引連参儀旨申出儀、然ハ兼而まめ

と不儀致シ罷有、其上右体」不法之儀有之、下賤之者と乍

申、風義を乱シ不屈至極之者ニ付、」鞭刑十八鞭被行、高

杉組搦被仰付之、

申渡御徒目付 出座足輕目付 町同心警固 町同心 鞭

取」 繩取 附添足輕目付・町同心 〔三三三〕

154 文化六年五月廿三日

一於評定所大目付申渡之覚

御中小性 菊池九八郎



其方儀、小針屋傳藏々芝田屋長右衛門江相返不申御手形ヲ

以、「傳藏申合、手段取巧、錢受取ニ向、及乱妨ニ由旨相

開得、僉議之処、「相違無之旨申出、言語同断不届至極之

者ニ付、急度可被仰付」由得共、格段之以 御憐愍、身上

被召上、永之御暇被下置由、大場」御擣三里四方追放、家

屋敷御取上、家財ハ妻子江被下置之、「

申渡大目付 出座四奉行・御目付・両目付・町同心 附

添足輕目付・町同心」

155 〔二八〇〕  
文化七年四月廿三日

一 於廣田組鶴ヶ岡村端御徒目付申渡之覚

廣田組赤堀村茂右衛門妹 さ ん

我儀、霧ヶ岡村角左衛門子酉藏方江嫁入之処、同村九左衛

門子」勇藏と申合、出奔致シ、其後兄茂左衛門見當呂連罷

帰」由処、又々勇藏方江罷帰、兩人共野木村致住居由趣相

開得、御僉議之処、勇藏致密通由旨及白状由、然ハ夫

有之身分ニ而、右林之致方、人道を乱シ言語同断不届之

者ニ付、鞭刑十五鞭被行、兄茂右衛門江御預之上、急度押込

被仰付之、

一 霧ヶ岡村九右衛門子勇藏儀ハ鞭刑三十鞭被行、大場御擣十里

四方追放被仰付由事、

一 茂右衛門妹さん不儀致由ニ付、鞭三十便可被行者ニ有之由得

共、女之儀故、「十五鞭被行、残鞭數あかない錢上納可被仰

付等之処、さん取戻」可申由、勇藏親類共及不法取返度不相

成趣申出有之ニ付、「あかなひ錢上納、御免錢上納御免之上、

妹さん御預被仰付、「急度押込置由様被仰付由様、

一 勇藏儀さんと不儀致、去冬出生之子有之ニ付、九右衛門方江

引取養」育致由様被仰付由様、左由ハ、右何レモ郡奉行ニ而

可被申付旨、沙汰之通、「書付ニ而申遣之、

但女追放之儀、寛政八年此方ニ御近例無之、公義ニ而も

稀之」事之由ニ付、兄茂右衛門江御預之儀、別ニ申出有之、

156 〔二八一〕  
文化八年六月三日

一 於評定所御目付申渡之覚

以上支配 佐藤弁之進

其方儀、不行跡ニ而度々御役下等被 仰付由得共、相慎不

申、上を」不恐、不行跡増長致シ、悪者等出會致由旨相

開得、言語同断」不届至極之者ニ付、急度可被仰付由得共、

以 御憐愍、御給分被」召上、永之御暇被下置、大場御擣

三里四方追放被仰付之、尤家」財ハ妻子江被下置之、

資

其方儀、不行跡ニ付先年御呵も被仰付ひ得共、不慎ニ而上を不恐、<sup>〔三四オ〕</sup>不行跡増長、悪者等出會致ひ儀相聞得、不届至極之者ニ付、急度<sup>〔三四オ〕</sup>可被 仰付ひ得共、以 御憐愍、御給分被召上、永之御暇被下置、大場<sup>〔三四オ〕</sup> 御搦三里四方追放被仰付之、尤家財ハ妻子江被下置之、<sup>〔三四ウ〕</sup>

『要記秘鑑 三十三』は、縦二三・三センチ、横一六・八センチの大きさで、横刷毛目の茶表紙を青糸で四目綴じし、内容は袋綴じの目録二丁、本文墨付九〇丁と白紙一丁（他の丁と同様に「九一」と表左上隅に丁数を小さく記す）から成り、下小口には「凶事向 卅三」と記す。

表紙上部中央の書票は右肩に朱で「雑」と記すが、その中央には新たに弘前図書館の書票が貼られたため、文字は読めない。新書票には上から下へ「主綱」郷土 「要目」要秘 「棚」一八 「冊」全14冊13巻」と記す。表紙の右下隅に現在の配架ラベル「K二〇九／二／三三」（算用数字で）が貼られている。本文第一丁表の右肩に朱方印「青森県弘／前市立弘／前図書館」が捺され、右下隅に登録印「登録一四九四六号／明四〇年

八月六日受入」（算用数字で）があり、下に「K二〇九／二」（算用数字で）と記す。

本稿は、『三十三』のおよそ三分の一に当たる。

引用の便宜のため、これまで通り「〔一〕」「〔二〕」「〔三〕」……、1・2・3……を付した。

ところで弘前図書館に所蔵されている『御用格』は四編から成る。同館の目録によれば、第一編は寛政本と記され、二四冊である。第二編は「従寛政三年至文政七年」の二五冊、第三編は「従文化八年至弘化四年」の二〇冊、第四編は「従嘉永元年至安政六年」の二五冊である。このうち第三編は「吉事」までで、あとの「凶事」「変」を欠く。

この『三十三』に対応するのは、第一編では、第二一 凶之部（逼塞 閉門 蟄居 御預 御役下 御暇 追放 義絶・勘当・和談 一間所・他出差留・声高 咎人御国下シ 入牢・出牢 御仕置、遠慮諸事）であり、第二編では、卷二一 凶事（被仰出附詮儀 閉門 逼塞（記事なし） 蟄居 御預 御目見以上・御役下 御目見以下・御役下 御目見以上暇 御目見以下御暇 御家中御給人追放 陪臣并在町浦之者追放 鞭刑并送返 儀絶勘当和談 一間所・他出差留・声高 咎人御国下 入牢出牢 盜賊召捕 御仕置 遠慮諸事慎ニ付申立共）である。